

## 近代日本とイギリス理想主義

－河合榮治郎と B・ボザンケ－

Modern Japan and the British Idealism

芝 田 秀 幹

Hideki SHIBATA

### 目次

#### はじめに

#### 第 1 章 研究者としての河合榮治郎－イギリス理想主義・ボザンケ研究－

1. 河合とグリーン
2. 河合とボザンケ
3. 河合のボザンケ研究(1)－『国家理論』－
4. 河合のボザンケ研究(2)－ヘーゲリアン・国家主義・体制擁護－

#### 第 2 章 思想家としての河合榮治郎－河合の国家論－

1. 研究者から思想家へ－河合のボザンケ研究の妥当性とボザンケに対する評価－
2. 河合事件
3. 河合の国家論(1)－「全体社会」と「部分社会」－
4. 河合の国家論(2)－『国民に懇う』・『学生に与ふ』－

#### 第 3 章 河合榮治郎と B・ボザンケ－比較検討－

1. 河合・ボザンケ・多元的国家論(1)－河合に対するボザンケの思想的影響－
2. 河合・ボザンケ・多元的国家論(2)－筆者(芝田)への批判に応えて－  
結びにかえて

## はじめに

河合榮治郎（1891-1944〈明治28－昭和19〉年）は、ファシズム批判、国家主義批判、マルクス主義批判を展開し、また五・一五事件（1932〈昭和7〉年）、二・二六事件（1936年〈昭和11年〉）を齒に衣着せず批判した思想家として、「戦闘的自由主義者」と呼ばれている<sup>1</sup>。しかし、河合は思想家である一方で、東京帝国大学経済学部教授としてイギリス思想史の研究者というキャリアをもっていた。なかでも、河合のイギリス理想主義（British Idealism）、とりわけグリーン（Thomas Hill Green: 1836-1882）に関する研究は、それまで我が国において多くを数えなかったイギリス理想主義の研究を大きく進展させるものであった<sup>2</sup>。

だが、河合のグリーン研究は、我が国初の体系的な研究としては意義深いものの、より客観的なグリーン像を剔出する立場からはなお問題をはらむものであった。たとえば、河合の教え子である木村健康は、河合のグリーン研究の集大成である『トーマス・ヒル・グリーン思想体系』（以下、『思想体系』と略記）を「むしろ河合教授が自己の思想体系をグリーン著作を材料として叙述したもの、つまり「河合榮治郎教授の思想体系と称しても差支えないほど」のものと位置づけ、河合の描いたグリーン像を禁欲的な研究者によるものではなく、思想家としての河合が独自に描いたものと捉えている<sup>3</sup>。実際、戦後に再開されたグリーン研究は、河合の研究を踏まえつつもそれをより客観的なものにすることで河合を「乗り越えよう」とする意図の下で行われてきた。それゆえ、1983年に刊行された行安茂、藤原保信の編集による『T・H・グリーン研究』<sup>4</sup>は、若松繁信が指

---

\* 河合榮治郎の文献に関しては主として『河合榮治郎全集』全23巻別巻1（社会思想社、1967-69年）を用い、以下の註においては、著者名、書名・論文名等、『全集』巻数、頁数の順で記した。

<sup>1</sup> 猪木正道「リベラリスト・ミリタント」、社会思想研究会編『河合榮治郎・伝記と追想』（社会思想研究会出版部、1948年）344頁、田中浩『近代日本と自由主義』（岩波書店、1993年）3頁。

<sup>2</sup> 河合以前の我が国のグリーン研究に関しては、行安茂「日本におけるT・H・グリーンの内容」、行安茂・藤原保信責任編集『T・H・グリーン研究』（御茶の水書房、1982年）第2部第6章参照。

<sup>3</sup> 木村健康「解説」、『全集』第二巻、428、433頁。

<sup>4</sup> 行安・藤原編、前掲書、1982年。

摘するようにやや河合のグリーン像を「補完」する側面があったとはいえ<sup>5</sup>、戦後の本格的なグリーン研究の一つの結晶であり、河合が描いたグリーン像をより客観的な立場から修正したものといえよう。さらに、河合とグリーンをその宗教論を切り口にしてそれぞれを対象化し、その思想的相違点を浮き彫りにした、2002年発表の前出の行安による論考「河合榮治郎と T・H・グリーン解釈」も、ややもすれば流布されがちな、河合自身の思想はグリーンをその思想の焼き直しに過ぎないであるとか、「河合＝グリーン」といった短絡的な評価を否定した点で<sup>6</sup>、グリーンおよび河合の思想の客観的把握を大きく前進させるものであったといえよう。

ところで、グリーンをその思想は彼の死後、その門下生たちによって継承され、いわゆるオックスフォード学派（Oxford School）が形成されるに至った。そして河合も彼らの思想を研究し、彼らの思想とグリーンを比較検討することによって改めてグリーンに思想的卓越性を付与していた<sup>7</sup>。だが、河合とこうしたグリーン以外の理想主義者との関係を明らかにする作業は、最近まで河合自身に関する体系的な研究成果が公になっていなかったこと<sup>8</sup>、そしてグリーン以外のイギリス理想主義の思想家が我が国ではほとんど等閑に付されてきたこともあって管見の限りほぼ皆無である。そこで、本論文では後期オックスフォード学派の代表的な哲学者と目されるバーナード・ボザンケ（Bernard Bosanquet: 1848-1923）をとり上げ、

<sup>5</sup> 若松繁信『イギリス自由主義史研究』（ミネルヴァ書房、1991年）65頁。

<sup>6</sup> 行安茂「河合榮治郎と T・H・グリーン解釈」、河合榮治郎研究会編『教養の思想 - その再評価から新たなアプローチへ -』（社会思想社、2002年）191-208頁。

<sup>7</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーンを思想体系 II』、『全集』第二巻、第14章。

<sup>8</sup> 河合についての初の本格的・体系的な研究としては、近時公にされた松井慎一郎『河合榮治郎－戦間的自由主義者の真実』（中央公論新社、2009年）が真っ先に挙げられる。松井は、現在の河合研究の第一人者といえるが、ただ河合に対してやや好意的過ぎる立場から評価を下していることから、その研究成果には異論も提出されている。たとえば、清滝仁志は、松井の「河合は満州事変を否定的に捉えていた」とする指摘に対して「そこまで断言してしまうのには、躊躇を覚える」としている。清滝仁志「教養と社会改革－社会思想家・河合榮治郎（三）」（『駒沢法学』第10巻第3号、2011年）69頁。また、松井、清滝による優れた研究以外で、実証的な河合研究としては以下を参照。Atsuko HIRAI, *Individualism and Socialism: Kawai Eijiro's Life and Thought (1891-1944)* (Cambridge and London: Harvard University Press, 1986). また、名古忠行「河合榮治郎の政治思想」（『山陽論叢』第15巻、2008年）29-44頁、青木育志『河合榮治郎の社会思想体系－マルクス主義とファシズムを超えて－』（春風社、2011年）も参照。

河合の生涯を追跡しつつ、彼が描いたボザンケ像やその妥当性、また河合とボザンケとの思想的関係を明らかにする。

ところで、グリーンと常に対比させられ、いわゆる「ヘーゲル流国家主義者」「全体主義者」とのレッテルが貼付され続けてきたボザンケに対する河合の研究および評価にあえて焦点を絞るのは、前述のように、ボザンケという思想家が我が国ではこれまで等閑視され、ボザンケ研究の後進性が学界で常に指摘されてきたことだけに起因しない。河合が研究者としてボザンケをどのように理解していたかを、復活の兆しが見えるボザンケ研究の最近の動向に照らし合わせて検討すれば、河合の研究者としての本質を示すことができるはずであろうし、また河合が、従来、国家主義と呼ばれていたボザンケの思想を、国家主義とは恐らく対極に位置するであろう「戦闘的自由主義」の唱導者としてどのような評価を下していたかを検討すれば、河合の思想家としての本質を剔抉できると考えるからである。約めていえば、河合が行ったイギリス理想主義研究、特にそのボザンケ研究を検証しながら、彼の研究者および思想家としての本領を剔出することが本論文の目的である。

そのために、以下においては河合がグリーンやボザンケを知るに至った経緯をまず示し、次に研究者として河合が描いたボザンケ像、河合が剔出したボザンケの思想的特徴を明らかにし、そのうえでそれらの妥当性について近時のボザンケ研究の成果を踏まえながら検討する。以上は、研究者としての河合榮治郎の本質を抉り出すための作業である。次に、思想家としての河合榮治郎の内実を探るべく、河合のこうしたボザンケ研究およびその成果から読み取ることのできる河合自身の思想、特にその政治思想・国家思想の特徴を明らかにし、そのうえで河合が『ファッズム批判』や裁判闘争等のなかで提示した具体的なその国体論、国家論、天皇論等を検討し、最後に河合に与えたボザンケの思想的影響、すなわち河合の政治思想・国家思想における「哲学的国家理論」的な側面を考察する。そして以上の作業を通じて、河合を含んだ我が国のボザンケの研究史の一端を明らかにしつつ、河合のカリスマ的な人格を回顧するといった<sup>9</sup>、かつての河合研

究において主流であった「思い出」<sup>10</sup>的な研究からの脱却も同時に試みたい。

## 第1章 研究者としての河合榮治郎ーイギリス理想主義・ボザンケ研究ー

### 1. 河合とグリーン

河合がイギリス理想主義、とりわけグリーンの名を知ったのは、彼が農商務省の官吏としてアメリカに留学していたときであった。河合は小野塚喜平次、美濃部達吉らの教えを受けた東京帝国大学法科大学政治学科を1915（大正4）年に卒業し、在学中から関心を寄せていた労働問題に取り組むために農商務省に入省した。農商務省で、河合はすでに1911（明治43）年に制定されていた工場法の施行に伴う勅令・省令を検討する仕事に従事するが、仕事が進むにつれて自らと上司との間に埋めがたい意見の不一致を見いだすようになり、自己の思想を再検討するように迫られた。河合はこの点を以下のように述べている。

「対立は資本家か労働者かと言う形式でなしに、国家か労働者かという形式で現れて来るのである。国家を労使両階級から超然とした地位に置き、而も之を絶対的な価値あるものとする国家主義の、牢乎不拔な堅城の前に、私の労働者保護は常に敗北したのである。そこで私は重要な一つの問題の前に置かれた、一体国家が目的なのか、個人が目的なのかと。」<sup>11</sup>

やがて、河合はこうした問題意識から「社会改良の理論的基礎」や「社会哲学」を求めるようになり、その知的欲求は、その後彼が官吏としてアメリカに留学（1918-19（大正7-8）年）したさいに出会った2冊の書物、すなわちダイシー（Albert Venn Dicey: 1835-1922）の『19世紀イギリスにおける法と世論との関係』（*The Relation between Law and Public Opinion in England during the Nineteenth Century*）とグリーン

<sup>9</sup> たとえば、河合門下生の猪木正道は、河合の「人格的迫力」から強い影響を受けたことを回顧している。猪木正道「私が闘った空想的社会主義者たち」（『This is 読売』3月号、1999年）230頁。

<sup>10</sup> 岩本典隆『近代日本のリベラリズム』（ミネルヴァ書房、1997年）17-18頁。

<sup>11</sup> 河合榮治郎『第二学生生活』、『全集』第一七巻、173-174頁。また、松井慎一郎「河合榮治郎の労働問題研究」（『日本歴史』第604号、1998年）81-97頁参照。

『政治的義務の原理』(*Principles of Political Obligation*)によって満たされることになった。河合は、留学先のジョンズ・ホプキンス大学の図書館で偶然手にしたダイシーの書から、「自由主義」というタームが「余りに複雑にして茫大なる思想」であり、「真摯な研鑽の対象とすべき」ものであることを認識した。さらに、河合は同じダイシーの書からベンサム(Jeremy Bentham: 1748-1832)の思想を学び、ベンサムの哲学に「社会思想と哲学との関連した一体系」、すなわち「私が手探っていた社会思想の理論的基礎付け」を見いだした。しかし、河合はこのときベンサムの哲学そのもの、すなわち功利主義の思想には共鳴しなかった。むしろ、河合はダイシーの書を通じて自らの思想が「ベンサムの功利主義との妥協を許さない」ことを認識するのであった。河合はいう。

「従って、ベンサムは私が受け容れうる哲学の体系を私に示したのではなくて、いかに哲学と社会思想とが有機的関連を保つべきかと云う示唆を私に投じたのである。」<sup>12</sup>

そして河合のこうした反功利主義的な思想にあわせるかのように、彼はグリーンの『政治的義務の原理』に出会うことになった。河合は、ジョンズ・ホプキンス大学で哲学を教えていたスロニムスキー教授にこの書を勧められたときの様子を次のように記している。

「氏〔スロニムスキー教授〕は社会改良の理論的基礎付けに関する私の要望を聞いて、研究室の書棚から一々書物を取り出して話して呉れたが、やがてトーマス・ヒル・グリーンの「政治義務の原理」を抜き出し、恐らく君の渴望しているのは之だろう、グリーンはカントに次いで一九世紀最大の思想家だと思ふ、此の本は一頁を読むのに一時間を要するが、然し読むに価すると云われた。」(□内一筆者、以下同様)<sup>13</sup>

こうして、河合はアメリカにおいてグリーンの名を知り、イギリス理想主義の思想全体に関心をもつようになった。河合は「直ちに帰途グリーンの本を求め」、「米国で読む暇がないので、日本で読むことを楽しみにして

<sup>12</sup> 河合榮治郎『第二学生生活』、『全集』第一七巻、176-177頁。

<sup>13</sup> 同上書、178頁。

持ち帰るが、帰国後は官吏としての仕事に忙殺され、グリーンの手紙を  
解する暇をほとんど持たなかった。だが、河合はそのようななかで「官吏  
としての立法に参与することに対して置く重要性」が減じてゆくのを感じ、  
同時に「労働問題に対して私の態度を根本的に確立したい」という欲求に  
駆られるようになった。そこで、河合は官吏を辞める決意を固め、1919  
(大正8)年11月、『東京朝日新聞』に「官を辞するに際して」と題する文  
を發表して農商務省を去るのである。

その後、河合は、アナキストのクロボトキン (Piotr Aljeksjejevich  
Kropotkin: 1842-1921) の研究によって大学を追われた森戸辰男の後任  
として、1920(大正9)年に「経済学史」担当の助教授として東京帝大経  
済学部招聘された。そして河合は、研究テーマとしてイギリス思想(史)  
を選定した。河合はいう。

「何故に英国を選んだかと云うならば、官吏としての英国の労働立法史  
に親しみ、米国で英国の思想史に接したことにもよるが、英国が世界に於  
て最も高度の社会発展を為していること、又彼等が哲学と社会思想とに跨っ  
た思想体系を所持していたと云う諸点にあった。彼等の一々の思想は独逸  
の学者の如くに、深遠でも精緻でもなかろう、然し哲学と社会思想との有  
機的聯関を見るには英国の思想家を検討するのが最もよいと考えたので、  
先師の門を敲くが如き心情を以て、アダム・スミス、ベンサム、ジョン・  
スチュアート・ミルからグリーンへと思想の推移を辿って往った。」<sup>14</sup>

しかし、河合はイギリス思想の研究を進めるなかでベンサムとミルの研  
究に「多大の時間と労力を割」いてしまい、グリーンの手紙の『政治的義務の原  
理』には「まだ手を着けるに至らなかった」。そこで、河合はスミス  
(Adam Smith: 1723-1790)、ベンサム、J・S・ミル (John Stuart Mill:  
1806-1873) までの研究成果を『社会思想史研究』の第一巻として發表し、  
グリーンに関してはその第二巻として發表する計画を立てた<sup>15</sup>。そして時  
期同じくして、河合は文部省在外研究員に選ばれイギリスに留学する機会

<sup>14</sup> 同上書、179-180頁。

<sup>15</sup> 河合榮治郎『社会思想史研究』、『全集』第四巻、10頁。

を獲得した。かくして、河合は、まだ着手していなかったグリーンの研究を開始するべくイギリスに旅立つのである。

河合は、1922（大正11）年11月に日本を離れ1923（大正12）年1月にイギリスに到着するが、しかし到着後すぐにイギリス理想主義の研究に入った訳ではなかった。河合はしばらくの間イギリス各地を観光したり、また「フェビアン協会」（Fabian Society）夏期学校（後に河合はフェビアン協会の会員に選出される）、「労働組合会議」（TUC）大会、「独立労働党」（ILP）夏期学校などに参加したりするなどしていた。しかし、河合は同年9月にオックスフォードに移ってからは本格的な研究生活に入り、精力的に読書を進めていった。当初、河合はオックスフォードで経済学関係の書物から目を通すつもりであったが、いざ経済学の勉強を開始してもなかなかはかどらず、結局「哲学への興味がそれを上回」<sup>16</sup>り、グリーンの研究に向かうことになったのである。

こうして、河合はグリーンの名をアメリカで知り、その研究をイギリスで本格的にスタートさせることになるが、以上のような留学時代の河合の関心からは、その後の河合の思想の特徴を裏打ちする点がいくつか看取される。たとえば、粕谷一希は河合の思想の特徴のひとつを「体系性への指向」に求めているが<sup>17</sup>、その点はすでにアメリカ留学時代に覚えたベンサムの体系哲学への共鳴という形で確認できる。また、行安茂が「グリーンを知らずして河合は理解できない」<sup>18</sup>と指摘するように、河合の思想の最大の特徴であるグリーンの思想の援用も、アメリカおよびイギリス留学時代における彼のグリーンへの関心という形で確認できる。それゆえ、河合にとって両国への留学は彼の思想および研究の礎石をなすものであり、その後の研究者および思想家としての人生を大きく規定するものであったといえよう。

ところで、河合はイギリスにおいてグリーン『政治的義務の原理』と

<sup>16</sup> 江上照彦『河合榮治郎伝』、『全集』別巻、155頁。

<sup>17</sup> 粕谷一希『河合榮治郎－闘う自由主義者とその系譜－』（日本経済新聞社、1983年）41頁。

<sup>18</sup> 行安茂『河合榮治郎の思想体系』（『社会思想研究』第16巻号第4号、1964年）2頁。



並んで、グリーンのいわば「愛弟子」であるボザンケの『哲学的国家理論』(*The Philosophical Theory of the State*) (以下、『国家理論』と略記)にも接し、それを耽読することで自らのボザンケ像の基礎を構築していった。そしてこの様子は、河合の留学時代の「日記」に克明に記されることになった。次にこの点を検討しよう。

## 2. 河合とボザンケ

河合はオックスフォードで本格的なグリーン研究に入り、その研究の環境としてボザンケの研究にも着手するが、しかし河合はそれ以前からボザンケの思想を部分的に認識していた。たとえば、河合はイギリスに到着した直後、ロンドンで新自由主義 (New Liberalism) の思想家ホブハウス (Leonard Trelawney Hobhouse: 1864-1929) やホブソン (J. A. Hobson: 1858-1940)、あるいは社会主義の思想家ラスキ (Harold J. Laski: 1893-1950) らと会見し、彼らからボザンケに対する評価を聞いていた。しかし、彼らのその評価は、彼らがボザンケに対して批判的な態度をとっていた「反ボザンケ派」に属する人物であったことから、当然のことながら否定的なものであった。たとえば、河合は、新自由主義の唱道者であったホブソンと接見した際の様子を次のようにまとめている。

「用件に入ったら「それでは書齋へ」と云われるままに、氏のライブラリーへ往って、自分の質問を出した。氏はこれに答えて呉れてから、棚の書物を一冊宛引き出して一々感想を述べて往かれた、之は僕にとって頗る興味があつた。やがてボザンケの「国家の哲学的学説」の所に往ったら「之はご存じでしょうが、私はこの本が嫌いなのです。ボザンケは慈善主義者です、其れ以上一步も社会の変革に賛成しないのです。ヘーゲリアンはともすれば、スターツス・クォー (Status Quo) に陥り易い」と。ボザンケはロックと共にチャリチー・オルガニゼーションの主要な人物である。此の一語を以て社会思想の方面より来るアイデアリズムへの抗議が窺い知られるであらう。」<sup>19</sup>

しかし、河合はこうしたボザンケに対する否定的評価をこのときそのま

ま鵜呑みにすることはなかった。というのは、河合はこの時点ではまだ『国家理論』を読んでおらず、また河合がその後オックスフォードで『国家理論』を読解してゆく過程およびその感想が、彼の「日記」のなかで以下のように綴られているからである。

河合は、オックスフォードに移ってからいろいろな本に目を通していったが、それらが皆「粗雑な書き方」で「自分を惹き付け」ず「どうも気がしがしない」ことから、「到頭止めて本当のものにつく気になり」、ボザンケの『国家理論』に着手する(1923年11月2日)<sup>20</sup>。当初、河合は何げなく『国家理論』を読んでいたが、しかし読み進めるうちに「自分の今迄求めていたものが、ドシドシ纏められて往く」ことを感じ、「とにかく早くこうした epoch making work に接したことはよかった」(11月5日)と感嘆するに至った<sup>21</sup>。特に、河合を感動させたのは『国家理論』の真髄である「国家干渉論」の部分であった。この点を河合は次のように述べている。

「今日のボザンケで国家の強制を論じた所は実に全巻の白眉であった。自由と強制との関係を自分のミルに於て論じた趣旨をモット分明にして呉れた。」(12月1日)<sup>22</sup>

ボザンケの国家論とは、国家という政治社会＝枠組みを称揚し、国家活動の役割を各人の道徳的発展の「妨害物」を「妨害」ないし「除去」する作用に求め、国家干渉を積極的に承認しつつも、国家活動が各人の道徳的発展を阻害する強制力(force)を含むものであることから、その国家干渉に厳格な制限を付すものであったが<sup>23</sup>、河合はこうしたボザンケの国家

<sup>19</sup> 河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、274頁。ちなみに、ホブハウスと接見した際の様子を、河合は次のように記している。「話は長時間に亘ったが、其の中で目下の英国の事情を知るに面白いと思った一節を述べると、僕が自由党の将来に付いて御尋ねした時であった。氏は云った、自分は自由党と労働党との立場を打って一丸としたようなものが欲しい、自分の原理としてもリベラリズムとソシャリズムを調和したものを作りたいと思う〔と〕。」河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、273頁

<sup>20</sup> 河合榮治郎「日記Ⅰ」、『全集』第二二巻、101頁。なお、河合が読解したボザンケの書名は日記には記されていないが、その内容から『国家理論』と推定される。ただし、それが何版であるかは不明である。

<sup>21</sup> 同上書、102頁。

<sup>22</sup> 同上書、107頁。

<sup>23</sup> 詳しくは、芝田秀幹『イギリス理想主義の政治思想－バーナード・ボザンケの政治理論』(芦書房、2006年)第4章参照。

論をここで絶賛するのである。やがて、河合は「本が哲学的のもの」で「難し」いことから（11月27日）<sup>24</sup>、「速度を鈍らし」つつも（12月5日）、約一カ月かかって『国家理論』を読了することになる。河合はいう。

「夜九時からボザンケをとにかく読了した。かなり長く掛かった。然し何か自分に与えられたようにも思う、明日ユックリそのまとめをしたいと思う。」（12月8日）<sup>25</sup>

こうして、河合はボザンケの『国家理論』の難解さに辟易しながらも、その書から感銘を受け、ボザンケから多くを学ぶのであった。

さらに、河合は『国家理論』以外のボザンケの文献にも目を通す。河合は、ボザンケの「フェビアン協会」での講演内容が記された「哲学的に考察された個人主義と社会主義の間の対照」（The Antithesis Between Individualism and Socialism Philosophically Considered）<sup>26</sup>を読み、その感想を次のように記している。

「午後、ユニオンでボザンケの「個人主義と社会主義」とを読んで、論旨に賛成しないし論鋒も別に自分にとって新しくはないけれども、歴史的文献として興味を覚えた。」（1924年1月30日）<sup>27</sup>

ボザンケの「フェビアン協会」での講演とは、ボザンケが社会主義思想を否定し、私有財産の擁護、現行の救貧法体制の基本的維持、および階級の存続等を訴え、それらの撤廃や改革を唱えるフェビアン協会員に反省を促すものであったが<sup>28</sup>、河合はこうしたボザンケの社会主義批判には共鳴しないことをここで明言するのである。

他方、河合はボザンケという人物そのものにも関心を寄せる。河合は、ボザンケの自伝的な論文「生活と哲学」（Life and Philosophy）を読み<sup>29</sup>、

---

<sup>24</sup> 河合榮治郎「日記Ⅰ」、『全集』第二二巻、105頁。

<sup>25</sup> 同上書、109頁。

<sup>26</sup> Bernard Bosanquet, "The Antithesis Between Individualism and Socialism Philosophically Considered", *Charity Organization Review*, Vol.6, 1890.

<sup>27</sup> 河合榮治郎「日記Ⅰ」、『全集』第二二巻、115頁。

<sup>28</sup> 芝田、前掲書、2006年、第8章参照。

<sup>29</sup> Bernard Bosanquet, "Life and Philosophy", J. H. Muirhead (ed.), *Contemporary British Philosophy*, Vol.1 (London: George Allen & Unwin, 1924), pp.52-60.

「哲人の自叙伝と云うものはどんなに沢山読んでも興のつきないもの」だとして「実に面白かった」(1924年1月30日)と率直な感想を記している<sup>30</sup>。また、河合はボザンケの夫人であるヘレン・ボザンケ(Helen Bosanquet: 1860-1925)が執筆したボザンケの伝記『バーナード・ボザンケ』(*Bernard Bosanquet: A Short Account of his Life*)<sup>31</sup>を読んで、「色々自分の生活」が「狭いものであった」ことに気づき、「英国アイデアリストはみんな偉大な教師である」と感動して<sup>32</sup>、ボザンケの『国家理論』のみならず、彼の生涯からも深い感銘を受けるのであった(1924年10月29日)。

他方、河合はボザンケを否定的に扱う書物にも目を通す。河合は前出のホブハウスによるボザンケ批判の書『形而上学的国家理論』(*The Metaphysical Theory of the State*)を読み、次のように感想を述べている。

「午前ホップハウスを読んで、少し戦争中の本として極端にヘーゲルやボザンケを扱う所はあるが、近來力のある書物である。」(1924年1月22日)<sup>33</sup>

「自分はヘーゲル派ではない、だからホップハウスの攻撃は痛快だと共鳴出来る。然し又自分の立場から再思を要するものであることを切に感じた。」(1月24日)<sup>34</sup>

このように、河合はホブハウスの書を通じて自らがヘーゲル主義者ではないこと、それゆえヘーゲル主義には与しないことを述べると同時に、ホブハウスによるヘーゲル・ボザンケ批判がやや曲解めいており、再考が必要であるとも述べるのである。実際、後に詳しく見るように、留学を終えて帰国した後の河合によるボザンケ研究のなかでも、河合はホブハウスの『形而上学的国家理論』でのボザンケ批判が「聊か戦争呪詛の興奮に駆ら

<sup>30</sup> 河合榮治郎「日記Ⅰ」、『全集』第二二巻、115頁。

<sup>31</sup> Helen Bosanquet, *Bernard Bosanquet: A Short Account of his Life* (London: Macmillan, 1924).

<sup>32</sup> 河合榮治郎「日記Ⅰ」、『全集』第二二巻、162頁。

<sup>33</sup> 同上書、114頁。

<sup>34</sup> 同上書、114頁。

れて」おり、「ボサンケの意図を曲解する嫌いが無いでもない」と指摘している<sup>35</sup>。

さて、このように、河合はイギリス留学中にボザンケの書物の読解に十分に意を注ぎ、ホブハウスのボザンケ批判を認識しつつも、またボザンケの社会主義批判を共鳴できないものとしつつも、ボザンケの政治思想や彼の理想主義者としての生涯に深い感銘を受けるのであった。そして河合のこうしたボザンケ研究は、河合が官吏時代に覚えた知的欲求を完全に満たす契機となり、河合自身の思想に確固たる根拠を供することになった。河合はイギリスでの読書生活を回顧して次のように述べている。

「読書としては少しく希臘の古典を窺い、主としてルッソー以後コールリッジ、カーライル、マシュー・アーノルドから始めて、グリーン、ケヤード、ブラッドレー、**ボサンケ**、リッチー、パチソン等の一群の人々の著作を貪るが如くに読み耽った。中でも最も私に感動を与えたのは、グリーンの外にルッソーの「社会契約論」ケヤードの「カントの批判哲学」「ヘーゲル」「哲学文学論集」ブラッドレーの「倫理学研究」**ボサンケの「国家の哲学的学説」**等であった。永く単に私の信仰としてのみあった理想主義は、ここで始めて理論的基礎付けをえて、動かぬ確信となりえた。農商務省の官吏として渴望していた社会改革の理論付けはえられた、ダイシーを読んでベンサムに対立すべき哲学の体系を求めた私の憧憬は満たされた。」(強調－引用者)<sup>36</sup>

かくして、河合は「その大綱に於て輪廓に於て、私の現在の立場は略々此の時に成立した」と述べ、オックスフォードでのイギリス理想主義研究等によって自己の思想が確立され、その研究のなかにボザンケの『国家理論』の読解が含まれたことを明言するのである。

その後、河合は1925（大正14）年7月4日にイギリスを離れ、途中アメリカに寄った後、8月6日に横浜港に到着し、約3年にわたる欧州留学を終える。日本に帰国した河合は、早速グリーンと並んでボザンケの思想の

<sup>35</sup> 河合榮治郎「随想集」、『全集』第二〇巻、51-52頁。

<sup>36</sup> 河合榮治郎『第二学生生活』、『全集』第一七巻、181-182頁。

本格的な研究にとりかかり、イギリス留学時代に獲得したボザンケに対する理解をさらに深めてゆく。

### 3. 河合のボザンケ研究(1)－『国家理論』－

1925年に帰国した河合は、早速イギリス理想主義の本格的な研究を開始し、その研究成果を次々に発表していった。そして河合のボザンケに関する研究の成果は、主として『在欧通信』、『思想体系』、雑誌『改造』の論文「国家主義の批判」、及び同じく『改造』の随筆「読書漫筆」において発表された。その詳細を検討する前に、これらの4資料について若干の補足をしておこう。

1926(大正15)年に単行本として発刊された『在欧通信』は、留学中に雑誌『改造』に河合が数回にわたり同じ題名で執筆していたものをまとめたものである。そもそも、河合が『在欧通信』の執筆を思い立ったのは、第一高等学校時代の先輩である鶴見祐輔から借りていた借金を返済するため、という金銭的理由もあったが<sup>37</sup>、それ以外にイギリスでの「思うさま異国の人物文化に接した思い出」やオックスフォードでの読書生活の様子を文書として留めたい、という河合の意欲にもよっていた<sup>38</sup>。それゆえ、そこにはイギリス留学中に河合が体験した事柄と並んで、オックスフォードで触れたさまざまな思想、すなわちグリーン、ホブハウス、ラスキらの思想に対する河合の見解が事細かに記された。そしてそのなかで、ボザンケの人と思想に対する河合の見解も示され、それを通じて河合の描くボザンケ像が初めて公にされることになった。

また、『在欧通信』執筆後、河合は「本書〔『在欧通信』〕に於て触れた数多の問題に付いて他日学術的論文を書きたい」<sup>39</sup>という意識から、『国家学会雑誌』や『経済学論集』(東京帝大経済学部紀要)に、①1870・80年代の社会哲学、②トーマス・ヒル・グリーンの社会哲学、③エドワード・

<sup>37</sup> 河合と鶴見祐輔との関係については、松井慎一郎「河合榮治郎と鶴見祐輔」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第44輯第4分冊。1999年)53-64頁参照。

<sup>38</sup> 河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、219頁。

<sup>39</sup> 同上書、220頁。

ケヤードのヘーゲル論、④バーナード・ボザンケの社会哲学、⑤英国自由党の指導原理、⑥後期理想主義者の社会哲学、という順序で論文を発表する計画を打ち出した<sup>40</sup>。しかし、その順序で研究を進めて行くうちに河合は「グリーン全体の思想体系を検討することの価値を認めるようになり」<sup>41</sup>、差し当たり①と②のグリーン研究の成果のみを『思想体系』として先に上梓し、③以降、すなわちボザンケに関しては今後の研究課題とした。実際、河合は『思想体系』では簡略にしか扱えなかった「グリーン以後の思想界」の部分で「グリーン以後の英国理想主義」と「最近思想」に分け、それらを『社会思想史研究』の続巻として発刊することをこのとき予定している<sup>42</sup>。

他方、河合は『思想体系』を執筆するなかで「彼〔グリーン〕を語りながら自己を語りえない制約を多く感」じたことから「私自身の体系を語る機会を持ちたい」と希望するようになり<sup>43</sup>、『思想体系』公刊後は研究者としてだけではなく思想家としても自立した仕事を志すようになった。河合は、1938（昭和13）年の『思想体系』の改装版の序文に「今日は相当にグリーンより脱しつつある自分を見出す」と記したうえで、思想家として、独自の哲学を「理想主義体系」として構築する予定をこのとき発表している<sup>44</sup>。

しかし、こうした思想家としての仕事に関心を寄せるなかであっても、河合はボザンケに対する関心を決して失わなかった。河合は、1934（昭和9）年に雑誌『改造』に発表した「国家主義批判」のなかで、国家主義との関係でボザンケの政治思想に言及し、さらに前述の「理想主義体系」の構築を発表した1938年にも、雑誌『改造』9月号の随筆「読書漫筆」において「ボザンケーとホブハウス」という題名で両者の比較研究を行っている。

<sup>40</sup> 河合榮治郎「英国理想主義運動」（『経済学論集』第5巻、1926年）23頁。

<sup>41</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーン思想体系Ⅰ』、『全集』第一巻、9頁。

<sup>42</sup> 同上書、10頁。

<sup>43</sup> 同上書、10頁。

<sup>44</sup> 同上書、8頁。

だが、この随筆の発表直後、後に詳しく検討するように、河合は内務省から『改訂社会政策原理』『ファシズム批判』『時局と自由主義』『第二学生生活』の禁禁処分を受け、さらに翌年の1939（昭和14）年には東京帝大教授休職命令が出され、自らの研究成果を発表する機会を失うことになった。また、その後河合自身も出版法違反で起訴され、研究を中断して裁判闘争に向かうという事態に陥った。このため、1939（昭和14）年以降、河合は論文等を発表することが困難となり、また裁判で有罪判決が出されたすぐ後の1944年に河合自身が53歳の若さで死去してしまうことから、『思想体系』発刊直後に予定されていたボザンケに関する研究書の発刊は実現せず、河合による体系的なボザンケ研究は未完のものとなった。しかし、河合は以上の4資料のなかでボザンケの思想について多く言及し、留学時代に獲得したボザンケに対する理解を深めつつ独自のボザンケ像を明快に示していた。以下、この点を検討しよう。

河合のボザンケに対する関心は、河合とほぼ同世代の哲学者である西田幾多郎（1870-1945〈明治2-昭和20〉年）らが、もっぱらボザンケの「実在性」（reality）といった形而上学的概念に関心を寄せていたのとは対照的に<sup>45</sup>、ボザンケの人物そのものや、彼の政治思想・国家思想、社会思想などに向けられた。河合はボザンケを以下のように描写する。

「グリーンはまだ「北英評論」にほんの二、三の論文を公表したに過ぎなかった。然しその後に又その死後に刊行されたものの多くは、当時教室に於て講義されつつあって、聴衆のあるものを魅了しつつあり他のものに新しき世界を展開しつつあった。而して此の後者に属するものにボサンケがいた。此处に附言すべきは、グリーン of の教えと事例との影響の淵源は、恐らく市民的活動と哲学的活動との調和にあった、而してそれこそが又その門弟たるボサンケの生涯の最も顕著なる特異性である。」<sup>46</sup>

こうして、河合はボザンケの哲学者であり、かつ実践家であるという生

<sup>45</sup> 西田幾多郎はボザンケの政治・社会思想にはほとんど関心を寄せてはいない。茅野良男・大橋良介編『西田哲学—新資料と研究への手引き—』（ミネルヴァ書房、1987年）290頁。

<sup>46</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーン of の思想体系Ⅰ』、『全集』第一巻、158頁。



涯そのものにグリーンの影響を看取する。実際、ボザンケはグリーンと同じく活発な実践家であり、ボザンケの属した「慈善組織協会」(the Charity Organisation Society)は、ボザンケが自らの思想を実社会に応用する場として活用された<sup>47</sup>。河合はこの点に着目しボザンケを最も「誘引し影響した」人物としてグリーンを挙げるのであった。

また、ボザンケをグリーン「の愛弟子」と位置づけた河合にとって、ボザンケはグリーン学派の後期を代表する思想家であった。河合は、ボザンケをイギリス理想主義の「第二代の人々の中で抜群の力を持つもの」<sup>48</sup>として次のように論及する。

「僕が英国に着いて間もなく、ボサンケ (Bernard Bosanquet) が物故した。仮令まだエフ・エッチ・ブラッドレーと云う大立者は存在していたとは云うものの、活動力の横溢したことに於て、ボサンケは確かに此の派の最後の代表者であった。」<sup>49</sup>

そのうえで、河合はボザンケの最高の業績として『国家理論』を挙げ、ボザンケの国家論こそが彼の思想の本領であると指摘する。河合はいう。

「ボサンケーは著作が多方面に亙っていることと、分量の大きいことで、此の派の中で群を抜いている。従って国家哲学のみが彼の主たる領域ではなかったが、グリーン「政治義務の原理」を除いては、ケヤードもブラッドレーも指を染めなかった国家の本質に就いて力作を残して、英国の後期理想主義はここに代表的な国家論を提供することとなった。」<sup>50</sup>

「ボサンケーは曾てグリーン「政治義務の原理」の別冊を刊行した時に、簡単な序文を付けて、その中にグリーン「の著述は近代の著であるに拘わらず、古典の貫録があると云ったが、ボサンケー自身の「国家の哲学的学説」が、そのテーマの取扱いの規模の大きいこと、その論法の堂々とした落着きのあることとに於て、巧智な才人の作ではなくて、確かに古典の

---

<sup>47</sup> Helen Bosanquet, *op.cit.*, 1924, p.52.

<sup>48</sup> 河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、355頁。

<sup>49</sup> 同上書、258頁。

<sup>50</sup> 河合榮治郎『随想集』、『全集』第二〇巻、48頁。

重々しさがある。」<sup>51</sup>

こうして、河合はボザンケの『国家理論』を古典としての重量感をもつ名著と理解し、ボザンケの思想的な業績をグリーンを除いてはその学派のだれによっても扱われなかった国家論に求めるのであった。実際、ボザンケの『国家理論』は、ボザンケの論敵であったラスキによっても「唯一グリーンの『政治的義務の原理』を除いて、イギリス人によって為された政治哲学への貢献の中ではミル以来最も偉大なもの」<sup>52</sup>と高く評価され、またラスキと同様にボザンケと鋭く対立した「フェビアン協会」のボール(Sidney Ball: 1859-1947)も同書を「哲学の古典」と位置づけた<sup>53</sup>。同様に、多元的国家論者のリンゼイ(A. D. Lindsay: 1879-1952)も『国家理論』を、グリーン『政治的義務の原理』を除くイギリス理想主義の政治理論書のなかで最も重要な政治理論への貢献と評価し<sup>54</sup>、オークショット(Michael Oakeshott: 1901-1990)も同書を「国家理論によって熟考されねばならない諸問題すべてに徹底的な注意を払った」「唯一の理論」かつ「最も包括的な説明」と絶賛した<sup>55</sup>。そして河合もこうした評価を追認する形で、『国家理論』を名著と把握するのである。

#### 4. 河合のボザンケ研究(2) -ヘーゲル主義・国家主義・体制擁護-

他方、河合はボザンケとヘーゲルとの関係にも触れ、ボザンケとグリーンとの間に存する若干の距離を次のように指摘する。

「此処に注意すべきことは、之等の一群の理想主義者は結局グリーンと大体の傾向を同じくするのではあるが、而も綿密に検討するならば、彼は

<sup>51</sup> 同上書、49頁。

<sup>52</sup> H. J. Laski, *Authority in the Modern State* (New Haven: Yale University Press, 1919), p.66 n.

<sup>53</sup> Sidney Ball, "Review of B. Bosanquet, *Philosophical Theory of the State*", *Mind*, n.s., Vol.10, 1901, p.155.

<sup>54</sup> A. D. Lindsay, "T. H. Green and the Idealists", in F. J. C. Hearnshaw (ed.), *The Social and Political Ideas of Some Representative Thinkers of the Victorian Age* (London, Bombay and Sydney: George G. Harpar, 1930), p.151.

<sup>55</sup> Michael Oakeshott, "Review of Bertil Pfannensteil, *Bernard Bosanquet's Philosophy of the State: A Historical and Systematical Study*", *Philosophy*, Vol.11, 1936, p.482.

独自の立場に立っていたことである。それは主としてヘーゲルに対する関係であるが、グリーン以外の人々は彼よりもヘーゲルに近く、殊にブラッドレー、ボサンケに於てその傾向が顕著であった。」<sup>56</sup>

しかし、河合はこのようにボザンケの思想を理想主義学派のなかでは相対的にヘーゲルに接近すると見つても、なおそれをヘーゲル主義と一線を画すものと理解する。河合はボザンケの政治思想を次のように論究する。

「一方に於て彼等〔理想主義者〕によって国家の強制はある場合に於て容認されると共に、他方に於て亦自由はベンサム、ミルに於けるよりも更により強く主張される論拠を得た。グリーンは「政治的義務の原理」ボサンケの「国家の哲学的学説」を読んで、如何に彼等の自由に対する力説の強いかに驚く。ここに英人特有の個人主義が窺われ、そしてここに彼等と独逸に於けるヘーゲリアンとの大差がある。」<sup>57</sup>

「アイデアリズムは元来プラトーンとヘーゲルとの研究から来た。然し具に英国アイデアリズムの作物を検するに当たって、其のプラトーン及びヘーゲルが、驚くべき程英国化されているを見る。グリーン、ボサンケを読んで、其の堂々と個人の自由を高調することに於て、却ってミル等に優るものあるを思わしめる。」<sup>58</sup>

かくして、河合は『国家理論』にJ・S・ミル以上に個人の自由が強く唱えられる側面等を看破し、それらの点にボザンケの政治思想とヘーゲル主義との相違を理解するのであった。実際、ボザンケは『国家理論』のなかで、ミルの唱える原子論的個人主義を否定しつつも、ミルの議論に各人の「人格の成長」、「個性」、及び「自由」を阻害する有害な国家干渉の唱導を看取し、ミル以上に国家干渉の厳格な制限を主張していた<sup>59</sup>。河合はこうした議論からボザンケの個人指向的・自由主義的側面を剔出し、イギリス思想との連続性を指摘するのである。

---

<sup>56</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーン思想体系Ⅱ』、『全集』第二巻、382-383頁。

<sup>57</sup> 河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、356-357頁。

<sup>58</sup> 同上書、262頁。

<sup>59</sup> 芝田、前掲書、2006年、第7章参照。

さらに、河合はボザンケの国際関係観からもボザンケとヘーゲリアンとの大差を指摘する。河合はいう。

「彼れの門弟たるボサンケに於ては動もすれば純ヘーゲリアンと目さるべき嫌いがあつたに拘わらず、彼は戦争に対して厳格なる態度を持し、一日も早く国際仲裁裁判の実現されんことを希望し、国際平和の将来を夢想したるは、彼と多くのヘーゲリアンとを区別する主要な点である。」<sup>60</sup>

ボザンケは自らの政治理論のなかで国家を高く位置づけ、いわば「リアル・ポリティーク」(realpolitik)の立場をとりつつも、他方で「国際連盟」(the League of Nations)の成立を歓迎し、また「世界国家」(World State)の可能性を信じていたが<sup>61</sup>、河合はこの点にもヘーゲル主義とボザンケの思想との相違を看取するのである。そして河合は、ボザンケの思想がヘーゲル主義と性格を異にする根本的要因を、ボザンケに対するグリーンの思想的影響に求める。河合はいう。

「グリーンが等しくヘーゲルの流れを酌む拘わらず、その誤謬に陥るを避けたることが、英国理想主義と独逸理想主義との重要な差異である。グリーンの同友ケヤードは彼より稍ヘーゲルに近く、彼れの門弟ボサンケは更に彼よりもルッソー、ヘーゲルに近い。然しグリーンに於てヘーゲルとの差異は截然たるものがある。之れホップハウスがボサンケを難ずるに峻烈を極むるに反し、グリーンに対するに寛容であり却ってグリーンに返れと云う所以であろう。たとえ彼よりもヘーゲルに近いボサンケに於てさえ、決してヘーゲルの帰結に全的には是認しているのではない、之れ英国理想主義運動の先駆たるグリーンの態度に依るものが多い。」<sup>62</sup>

さらに、河合は、国家活動の役割を各人の「人格の成長」にとしての「障害の除去」(the removal of obstacles)に求めるグリーンの国家論が

<sup>60</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーンの思想体系Ⅱ』、『全集』第二巻、317-318頁。

<sup>61</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet*. 20 vols., Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol.V, *The Philosophical Theory of the State*, Fourth Edition, p.lix, Helen Bosanquet, *op.cit.*, p.136. また、芝田、前掲書、2006年、第9章参照。

<sup>62</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーンの思想体系Ⅱ』、『全集』第二巻、193-194頁。

ボザンケの国家論にも多く援用されていると指摘して、両者の政治思想の面での類縁を強調する<sup>63</sup>。実際、河合の指摘のように、ボザンケは自らグリーン思想から「生涯を通じて示唆を受けてきた」<sup>64</sup>と述べて、グリーン思想の影響を指摘している。また、ボザンケは『国家理論』で「国家〔活動〕それ自体は外的な諸活動を保証」し、「人格の成長」にとつての「諸障害を除去」し「目的の実現化に敵対する諸条件を破壊する」<sup>65</sup>と論じて、グリーン思想をそのまま受け継いでいる。河合は『国家理論』のこうした論法にグリーン思想の強い影響を看取して“ボザンケ＝ヘーゲリアン”という位置づけを否定するのであった。

しかし、河合はボザンケを“ヘーゲリアン”とは理解しないものの、ボザンケ思想を国家主義と断ずる。河合はボザンケの唱える「国家」について、次のように論究する。

「然し動もすれば国家を以て一の超個人的人格とし、個人に対する無限の権力を有するものの様に解され易い語句が多い。アイデアリズムの欠点の一つは其の表現の曖昧な所にある。最近社会思想の駁撃を受けたのは即ち此の点に於てであった。」<sup>66</sup>

「理想主義者殊にボサンケに於て、国家はあらゆる団体を超越した地位を持ち、教会、大学、組合その他の団体は、国家の一部分に過ぎず、国家の認可あることによりその存在を許され、その活動を国家のために捧ぐるものと看做された。グリーンに於ては国家の地位を重く視たにしても、決してかくの如き極端には至らなかった。然るにボサンケに至って始めて上述の如き国家至上主義に窮まった。ボサンケの著作が必ずしもかくの如き思想のみではないが、その表現がかく解せらるるも止むをえない個所の多かったことも事実である。」<sup>67</sup>

<sup>63</sup> 同上書、360頁。

<sup>64</sup> Muirhead (ed.), *op.cit.*, 1924, p.53.

<sup>65</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20 vols.*, Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol.V, *The Philosophical Theory of the State, Fourth Edition*, pp.176-177.

<sup>66</sup> 河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、262頁。

<sup>67</sup> 河合榮治郎『トーマス・ヒル・グリーン思想体系Ⅱ』、『全集』第二巻、388-389頁。

こうして、河合は『国家理論』での議論における曖昧さを指摘しながら、ボザンケの国家論に内在する国家主義的傾向を指摘するのであった。実際、ボザンケは『国家理論』で国家を「絶対的権力を保持する一つの共同社会」であり「文明生活における必須のファクター」と位置づけていた<sup>68</sup>。河合は、ボザンケのこうした主張から「英国に於て十九世紀末にボザンケ」によって「国家主義は唱えられ」<sup>69</sup>たと論じ、「此の書〔『国家理論』〕は今でも国家主義の典拠として重要である」と断ずるのである<sup>70</sup>。

ただ、河合は“ボザンケ＝国家主義”と位置づけたものの、その国家主義をヘーゲル主義的な専制的・独裁的な国家主義とは理解しない。河合はいう。

「さて、「国家の哲学的学説」は国家主義の代弁書ではあるが、それだけで片付けては充分ではない。先ず一九世紀末の英国が何故にこうした国家主義的文献を必要としたかと言うならば、それは資本主義を延命する目的でブルジョアジーの為に奉仕するが為でなく、労働者階級の福利を増進する為に国家の資本主義への干渉を是認せんが為であった。その為に牢乎たる個人主義の牙城を突く必要があったからである。かくして社会的背景と連關せしめて、注意深く此の書を読むものは、一抹の社会改革的情熱を觀取しうるのであろう。更に此の書は「自由」の概念を再検討して在来の伝統を打破してはいるものの、而も従来の「自由」を一擲しようとするのではなくて、到る所にベンサム、ミルの伝統を感知するであろう。此の意味に於て此の著は決して専制独裁を基礎づける国家主義の文献ではない。若し独逸に於てルソー、ヘーゲルを引用するものがあるならば、以上の二点に於てボザンケと対立するに違いない。かくしてボザンケの国家主義は英国に於ける国家主義である。」（強調－河合）<sup>71</sup>

<sup>68</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20 vols., Edited and Introduced, by W. Sweet* (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol.V, *The Philosophical Theory of the State, Fourth Edition*, p.158, 172.

<sup>69</sup> 河合榮治郎『ファッシズム批判』、『全集』第一一巻、121頁。

<sup>70</sup> 河合榮治郎『随想集』、『全集』第二〇巻、49頁。

<sup>71</sup> 同上書、49-50頁。

こうして、河合はボザンケの政治思想を国家主義と断じながらも、それを個人の自由を確保し、かつ労働者を保護する「イギリスの国家主義」と位置づけるのであった。さらに、河合はボザンケによる労働者保護のための国家干渉の承認に関連して、「フェビアン協会」とボザンケとの関係を次のように述べる。

「フェビアンとアイディアリズムとは策応して自由放任主義に当たった。ボザンケがフェビアン協会で講演したことがあり、ウェッブは一千八百九十年の初めに書いた「英国社会主義史」(Socialism in England, 1890)に於て、グリーン、リーチー等の人々を「社会主義的な」人々と書いている。そして両者は相合して国家の権力を増大し、個人の自由の制限を甘んずべきを説いたのであった。此の一点に於て両者は靈犀相通ずる。」<sup>72</sup>

河合は、このようにボザンケと「フェビアン」の両者の議論に自由放任主義を修正する側面を看取してそれらの共通点を提示する。

しかし、同時に河合はこうしたボザンケの国家干渉論に体制擁護・現状維持的な「保守的」側面をも見抜いて次のように論究している。

「のみならずボザンケーは国家の**哲学的**学説としては必ずしも保守的ではなかったが、現実の具体的政策に就いて他の著述で書いている所ではかたに保守的の臭味がある。」(強調－河合)<sup>73</sup>

そして河合はボザンケの具体的な政策論における体制擁護的な側面から、『国家理論』は批判にさらされることになったとも論ずるのである。

以上、帰国後の河合のボザンケ研究の内容を前出の4資料を中心に通観してきた。そこで明らかになったことは、河合がボザンケの思想及び生涯そのものにグリーンなどの強い影響を看取し、そこからボザンケを個人主義や自由を指向するイギリス独自の国家主義者であると位置づけ、そのうえで“ボザンケ＝ヘーゲリアン”という位置づけを否定したことである。また、河合がボザンケの『国家理論』を国家主義の典拠としつつも、その国家主義の特徴の一つを労働者保護の点に求め、その思想が専制的・抑圧的・ヘー

<sup>72</sup> 河合榮治郎『在欧通信』、『全集』第一七巻、263頁。

<sup>73</sup> 河合榮治郎『随想集』、『全集』第二〇巻、50頁。

ゲル的な国家主義ではないとしたことも明らかになった。さらに、河合が以上の議論を踏まえて、ボザンケの議論に体制擁護・現状維持的な側面を看取していたことも明らかになった。

ところで、河合はこのようにボザンケの特徴を明快に指摘したが、そのなかにはボザンケの研究史上において重要な指摘が多々含まれている。特に、ボザンケとヘーゲル主義との関係、ボザンケと国家主義との関係に関する指摘は、河合の研究者としての本領を把握するためにも、また河合自身の思想を認識するうえでも重要な意味をもつ。そこで、次に、河合のこうした研究者としての指摘とその妥当性を検討するとともに、河合がそうした指摘をもとにして思想家としてボザンケの政治思想に対して与えた評価を、河合自身の思想を視野に入れながら検討したい。

## 第2章 思想家としての河合栄治郎－河合の国家論－

### 1. 研究者から思想家へ－河合のボザンケ研究の妥当性とボザンケに対する評価－

河合は“ボザンケ＝ヘーゲリアン”という位置づけを否定し、その根拠をボザンケの思想に伏在するグリーンらのイギリス政治思想の影響に求めた。このような指摘は、ボザンケを「イギリスのヘーゲリアン」とする通説的見解とは対峙するものであるが、しかし近年の綿密かつ客観的なボザンケ研究の成果とは大筋で一致している。たとえば、ニコルソン（Peter P. Nicholson）、スイート（William Sweet）らによるボザンケに関する体系的な研究では<sup>74</sup>、ホブハウス、ラスキ、マルクーゼ（Herbert Marcuse: 1898-1979）<sup>75</sup>らによって示された従来の“ボザンケ＝ヘーゲリアン”という位置づけに修正が加えられている。それゆえ、河合の指摘は、

<sup>74</sup> Peter P. Nicholson, *The Political Philosophy of the British Idealists* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), William Sweet, *Idealism and Rights: The Social Ontology of Human Rights in the Political Thought of Bernard Bosanquet* (Lanham, New York, and London: University Press of America, 1997).

<sup>75</sup> H・J・ラスキ、石上良平訳『国家－理論と実践－』（岩波書店、1952年）、H・マルクーゼ、榎田啓三郎他訳『理性と革命』（岩波書店、1961年）。



近年のより客観性の高いボザンケ研究の成果と合致していることから、妥当性の高いものと考えられる。

他方、河合は“ボザンケ＝国家主義”と位置づけ、『国家理論』を国家主義の典拠と理解した。一見すると、河合のこうした指摘はボザンケの「反国家主義」的側面を提示した最近のヴィンセント（Andrew Vincent）らによる研究成果や<sup>76</sup>、前出のニコルソンによる最新の研究成果での「ボザンケは自らの注意をもっぱら個人に払ったのであり、国家に対して払ってはいない」とする指摘とは異なり<sup>77</sup>、むしろ従来のホブハウスやラスキらの評価に符合しているように思われる。しかし、河合はボザンケの国家主義を「イギリスの国家主義」と見なし、その特徴を自由指向、あるいは労働者志向等の点に求め、その国家主義を専制独裁を導くヘーゲル主義的国家主義と性格を異にするものと理解していた。つまり、河合は“ボザンケ＝国家主義”という主張を通じて再び“ボザンケ＝ヘーゲリアン”という位置づけを否定したのである。無論、河合が「国家主義」というタームをボザンケの政治思想に適用したのは、彼がボザンケをヘーゲルの影響をある程度受けたと理解し、『国家理論』にヘーゲル主義的国家主義と誤解されやすい文言を見ていたことに起因しよう。しかし、河合はそれを認めたくえでなおもボザンケとヘーゲル主義との相違を改めて指摘し、ボザンケの思想のイギリス的側面を強調したのである。それゆえ、そしてその限りで、河合の指摘は前出の最近の研究成果と符合するといえ、「国家主義」というその呼称の問題を別にすれば、その指摘も妥当性の高いものと思われる。

ところで、河合はボザンケの政治思想を国家主義であると断じたくえで、どのような評価をその思想に下すのであろうか。この点は、河合が思想家として剔出した「批判されるべき」国家主義の特徴と、河合が研究者とし

<sup>76</sup> Andrew Vincent and Raymond Plant, *Philosophy, Politics and Citizenship: the Life and Thought of the British Idealists* (Oxford: Basil Blackwell, 1984).

<sup>77</sup> Peter P. Nicholson, "Bosanquet and State Action", William Sweet (ed), *Bernard Bosanquet and the Legacy of British Idealism* (Toronto, Buffalo, and London: University of Toronto Press, 2007), p.225.

て剔出したボザンケの政治思想の特徴とを比較し、突合させることで明らかになる。河合は「国家主義の批判」において以下のように述べている。

「国家主義とは、国家を以て第一義的に終局的に価値あるものとして、他の一切のものは之に従属し、国家の手段として役立った場合にのみ、その価値を認めるに過ぎない思想を云うのである。」<sup>78</sup>

そして河合は、国家主義を批判されるべき対象と見る理由として、それが「保守主義に陥る」こと、「我々の道徳的源泉を枯死せしむこと」、「武力崇拜に陥ること」、「物質主義」であること、そして「弾圧独裁政治に傾きやすいこと」を挙げ、その種の国家主義を唱える代表的な思想家としてヘーゲルを挙げる<sup>79</sup>。しかし、河合が剔出したこのような国家主義の特徴は、河合が剔出したボザンケの政治思想の特徴と多くの点で異なる。何となれば、河合はボザンケの政治思想を個人や自由を指向するもの、あるいはグリーンと同じく各人の道徳的発展を中心に据えるものと見なし、ボザンケの国際関係論を武力崇拜によらないものと理解し、ボザンケの国家主義を各人の自由を尊重し、労働者を保護し、「専制独裁」を導かないものと認識し、そして何よりも“ボザンケ＝ヘーゲリアン”の位置づけを否定していたからである。それゆえ、河合がボザンケに対して付与した「国家主義」は河合が批判する国家主義とは異なり、その意味で河合の指摘するボザンケの国家主義は、河合の批判の対象から外れるものであったといえよう。

さらに、河合は“ボザンケ＝国家主義”の位置づけに関連して、ボザンケの国家主義の特徴の一つを労働者保護のための国家干渉の承認に見いだした。そして河合はこの点からボザンケと「フェビアン協会」との共通点を看取しつつも、他方でボザンケの思想を体制擁護・現状維持的な面を指摘していた。ボザンケのこうした側面に関する河合の指摘は、オッター（Sandra den Otter）の研究によっても為されており<sup>80</sup>、その限りで妥当性が高いものといえる。だが、ボザンケと「フェビアン協会」（フェビ

<sup>78</sup> 河合榮治郎『ファッシズム批判』、『全集』第一巻、114頁。

<sup>79</sup> 同上書、128-133頁。

<sup>80</sup> Sandra den Otter, *British Idealism and Social Explanation: A Study in Late Victorian Thought* (Oxford: Clarendon, 1996).

アン社会主義）との関係に関する河合の指摘は、マクブライア（A. M. McBriar）の研究によって、その両者が鋭く対立するものであったことが明らかにされている以上<sup>81</sup>、やや妥当性に欠けるものといえる。しかし、ボザンケの議論がやや体制擁護・現状維持的であるとの河合の指摘は、最近でも前出のヴィンセントらによって為されており、この点での河合の指摘は妥当性が高いものといえる。さらに、ボザンケと「フェビアン協会」との共通点に関する河合の（誤った）指摘についても、河合がボザンケの体制擁護的側面を看破していたことに鑑みれば、両者の実質的な思想内容についての指摘ではなく、あくまで国家干渉の承認という原則論的な側面についての指摘であったと考えられよう。

では、河合はこのように指摘したうえで、ボザンケの議論をどのように評価するのであろうか。この点は、河合自身の自由論を検討することで明らかになる。思想家として河合は、新自由主義を唱導したホブハウスの影響を受けて<sup>82</sup>、自由を①身体上の自由、②宗教上の自由、③思想上の自由、④政治上の自由、⑤社会上の自由、⑥経済上の自由、⑦団結の自由、⑧家族上の自由、⑨地方的自由、⑩団体の自由、⑪国民的自由、⑫国際的自由に分類して列挙する<sup>83</sup>。そのうえで、河合は、自由主義は歴史上3段階に分けられ、第1期の自由主義は「放任主義」、第2期の自由主義は「政府の資本主義に対する局部的干渉を認め」る「社会改良主義」、そして第3期の自由主義は「経済上の自由を確保する為に、私有財産制度の廃止を主張」する「社会主義」であると論ずる<sup>84</sup>。そして河合は「現代に於て自由主義の名を以て呼ばれるに値するものは、唯第三期の自由主義のみ」であり<sup>85</sup>、「私が採る自由主義とは、第三期のそれに外ならない」と主張する<sup>86</sup>。

<sup>81</sup> A. M. McBriar, *An Edwardian Mixed Doubles: the Bosanquets versus the Webbs* (Oxford: Clarendon, 1987). また、芝田、前掲書、2006年、第8章参照。

<sup>82</sup> 青木、前掲書、2011年、90頁。また、ボザンケとホブハウスの関係については、芝田秀幹「B・ボザンケとL・T・ホブハウス」（『沖繩法学』第40号、2011年）1-53頁参照。

<sup>83</sup> 河合榮治郎『自由主義の歴史と理論』、『全集』第九巻、51頁。

<sup>84</sup> 河合榮治郎『時局と自由主義』、『全集』第一二巻、107-108頁。なお、河合の自由主義論に関しては、武田清子『日本リベラリズムの稜線』（岩波書店、1987年）第5章参照。

<sup>85</sup> 河合榮治郎『時局と自由主義』、『全集』第一二巻、110頁。

<sup>86</sup> 同上書、218頁。

だが、河合にとって、グリーンらの理想主義者は第2期自由主義、すなわち社会改良主義に留まる思想家であった。河合はいう。

「彼〔グリーン〕は自由放任主義を抛棄したけれども、私有財産制度と自由競争制度を根本的に廃止しようとは思わなかった。之等の制度を保存して唯必要ある限度に於てのみ労働立法の形式に於て制度を加えようとしたのである。故に社会主義に非ずして社会改良主義と云われるべきものであった。」<sup>87</sup>

こうして、河合はより社会主義的な思想に共鳴すると同時に、グリーン社会改良思想に不満を覚えるのであった。それゆえ、グリーン「の『愛弟子』であり、社会改革に関してもグリーンと同様の議論を展開したボザンケの思想は、河合にとってはなお不十分なものであったと考えられる。事実、河合は、ボザンケを批判したホブハウスの強みを「現実を直視していること」に、そしてボザンケの議論の弱点を現実を直視しないことに求めている<sup>88</sup>。そして河合の上記のような主張と、河合のボザンケの思想に対する指摘（体制擁護・非現実主義）とを併せ考えれば、河合は私有財産撤廃のような社会主義思想に発展しないボザンケの社会改良論的な議論には批判的・否定的な評価を下していたと思われる。そのことは、かつて河合がボザンケの社会主義批判をイギリスで読んだとき、その「論旨には賛同しない」と日記で明記していたことから理解できる。それゆえ、河合のボザンケの思想における体制擁護の面についての指摘は、極めて限定された国家干渉のみを認めるボザンケの社会改良論を批判するものであったのと同時に、社会改良に留まり社会主義的な議論に発展しなかった彼の根本的な見解をも批判するものであったといえよう。

## 2. 河合事件

以上から、河合が研究者としての立場から、ボザンケの政治思想・国家思想をイギリス流の個人主義的・自由主義的、また社会改良論的なものと

<sup>87</sup> 河合榮治郎『ファッシズム批判』、『全集』第一一巻、369頁。

<sup>88</sup> 河合榮治郎『随想集』、『全集』第二〇巻、52頁。

理解し、その思想をヘーゲル主義とは一線を画す独特の国家主義と見なしていたことが明らかになった。また、河合は思想家としての立場から、ボザンケの政治思想、社会思想に、それが国家主義であるとの理由からではなく、それが社会主義にまで発展しない体制擁護・現状維持的な社会改良論であるとの理由で批判的であったことも明らかになった。

ところで、こうした河合のボザンケ研究のなかで特に注目には値するのは、河合がボザンケの思想を国家主義と位置づけつつも、その思想を国家主義という理由では批判しなかった点であろう。というのは、これまで河合は国家主義を批判した「リベラリスト」と見られてきたが、以上からは、河合は思想家としてすべての国家主義を否定した訳ではなく、ヘーゲル流の国家主義はともかくとして、ボザンケ流の国家主義ならば容認する可能性が出てくるからである。そしてこの可能性は、河合事件を巡る裁判を通じて、さらに裁判後に河合が精魂込めて書き上げた『国民に懇う』において現実のものとなった。つまり、河合は裁判闘争や『国民に懇う』において国家優位の主張を前面に押し出し、自ら国体護持・国家尊重・天皇崇拝の立場を鮮明にしたからである。そこでその詳細を検討しなければならないが、その前にここで河合事件について簡単にまとめておく必要があろう<sup>89</sup>。

河合事件とは、当時の右翼・文部当局によって河合の思想が攻撃され、河合自身、東京帝大から休職処分を受けて大学から追放された事件のことをいう。河合に対する攻撃は、かつて天皇機関説事件のさいに美濃部達吉攻撃の急先鋒に立った右翼議員、井田磐楠による、1938年2月の貴族院本会議での木戸幸一文相への質疑という形で現れたのが最初であった。井田は、横田喜三郎、田中耕太郎、宮沢俊儀らとともに河合を批判的とし、その思想を日本の国民精神に反する国家道德観であり、共產主義と紙一枚の思想と位置づけ非難した。その後、大学内外の右翼勢力から河合攻撃の声が大きくなり始め、同年8月には井田ら5名の議員が、国士館専門学校（現、国士館大学）教授の右翼教授、蓑田胸喜を連れて東京帝大を訪れて

---

<sup>89</sup> 以下、河合事件については、松井、前掲書、2009年、第4章に大きく依拠した。

抗議、さらに9月の蓑田らが主催した「帝大肅正学術講演会」(於日比谷公会堂)でも、「聖戦の意義と帝大学風」と題して演説した陸軍中將建川美次が「河合教授は共產主義者だ」と追及した<sup>90</sup>。

こうした学外からの声に、長与又郎東京帝大総長は舞出長五郎経済学部長ら呼んで河合の『ファシズム批判』の自発的絶版を進言したが、河合はこれに対し、「一步も引けない」として峻拒の態度を示した<sup>91</sup>。だが、10月5日、内務省図書課は『ファシズム批判』に加えて『社会政策原理』『時局と自由主義』『第二学生生活』の4冊を、それらが共產主義的、反軍思想的で「安寧秩序を紊す」との理由から発禁処分付した。さらに、文部省は河合の進退を問題にしはじめ、11月には長与総長または舞出経済学部長を招致して、河合の自発的辞職を勧告することを決定した。河合は追い詰められたが、日記に「頼む所は自分の信念丈だ。之を信頼して堂々と戦うことのみが自分に残されているのだ」(1938年11月9日)<sup>92</sup>と記して、闘う決意をこのとき新たにしている。

しかし、その後も河合に対する圧力は強くなり、1939年1月、田中耕太郎法学部長、舞出経済学部長らによって開催された河合の学説・著書に関する審査委員会では、河合が何らかの責任を負うべきとの結論に達し、新総長の平賀譲(前工学部長)はこれを受けて河合に自発的辞職を勧告した。だが、河合はこの勧告も拒否し、その後も再三の同様の勧告が出されるも同様にそれを峻拒し続けた。結局、学部長会議で、河合「教授ニ於テ責任ヲ負フコト至当ニシテ、光輝アル経済学部ノ再建ニハ」、「〔河合〕教授ノ在職ハ不可」との結論が出されると、平賀総長は、文部当局との連日の交渉を経て、1月27日、文部大臣に対して、文官分限令による河合の休職処分についての上申書を提出した<sup>93</sup>。河合は、大学の自治、教授会の自治、学問の自由などを否定する大学側に対し、「人間は只一筋の路を真直ぐに

<sup>90</sup> 土屋清「解説」、『全集』第一巻、398-399頁。

<sup>91</sup> 河合榮治郎「日記Ⅱ」、『全集』第二三巻、97頁。

<sup>92</sup> 同上書、99-100頁。

<sup>93</sup> この時、河合とともに財政学者で戦後中央大学教授を務めた土方成美についても休職処分が上申されている。

進むだけ」として、徹底抗戦の態度を鮮明にしているが、1月31日、文官高等分限委員会が開催されて河合の休職処分が可決され、閣議決定の後、上奏裁可を経て河合の休職が発令されることになった（「平賀肅学」）。

さらに、2月28日、東京刑事地方裁判所検事局は、河合の発禁処分の著書4冊を出版法第27条の「安寧秩序ヲ紊ルモノ」に該当するとして、著者河合とその発行人の鈴木利定日本評論社社長を起訴した。これに対し、河合の教え子である山田文雄、木村健康や、南原繁<sup>94</sup>、高木八尺、蠟山政道といった河合の友人が、弁護士海野晋吉とともに河合を支援することになり、ここに河合にとって「生涯における最大の闘い」<sup>95</sup>である裁判闘争が開始された。

ところで、この裁判は、橋川文三がそれを「国家と自由にかかわる最も生彩に富んだ思想闘争の一例」と評し<sup>96</sup>、前出の木村もまた「我が国に於ける純思想問題の嚆矢」<sup>97</sup>と指摘したように、河合にとっては自らの政治思想、特にその国家理論をより洗練化、体系化する契機となった。そしてその結果、西部邁も指摘するように、裁判を通じて国家論を含めた河合の「思想の全貌が、単にその輪郭にとどまらず、その細部にまで及んで、一望できる」<sup>98</sup>ことが可能となった。以下、1940年4月23日、東京地方裁判所で行われた第一回公判を皮切りに開始されたこの裁判闘争を手掛かりに、河合の国家論を検討してみよう。

### 3. 河合の国家論(1)－「全体社会」と「部分社会」－

河合の国家論には、裁判闘争の前後に関係なく、基本的には蠟山政道や山下重一らが指摘するように、多元的国家論＝政治的多元主義（the pluralist theory of the state: political pluralism）の強い影響が見ら

<sup>94</sup> 丸山眞男・福田歓一編『聞き書 南原繁回顧録』（東京大学出版会、1989年）191頁。

<sup>95</sup> 松井、前掲書、2009年301頁。

<sup>96</sup> 橋川文三「抵抗者の政治思想」、橋川文三・松本三之介編『近代日本思想史体系』第4巻（有斐閣、1970年）404-405頁。

<sup>97</sup> 「裁判記録」、木村健康「第四章 弁論要旨」、『全集』第二一卷、178頁。

<sup>98</sup> 西部邁『思想史の相貌－近代日本の思想家たち』（世界文化社、1991年）87頁。

れる<sup>99</sup>。そして裁判で問題となったのが、そして現在の河合研究でも論点となっているのが、河合の国家論における多元的国家論の影響の多寡を巡ってである。

まず、検事が提示した公訴事実は、①国家を部分社会として、大学、教会、労働組合といった部分社会と同列に置く河合の多元的国家観が、国家の絶対性を否定するもので、日本国民の伝統的国家観を批判し、戦時下の国民思想に動揺を与える、②理想主義的個人主義に基づく国家主義批判は、日本伝来の国民的思想かつ日本国家の精神的基礎をなす国家主義を専制主義、軍国主義、帝国主義を伴い道德の源泉を枯死させるものであると説くものであり、まさに日本国家の存在そのものに挑戦する行為と断ぜざるをえない、③世界平和確立を目的として各国の主権の自己制限をも認める国際的組織の樹立の提唱が、主権の絶対性を否認し、神聖な天皇の地位の冒瀆をも意味する、④いわゆる帷幄上奏権を憲法第11条の用兵作戦にのみ限定し、第12条のいわゆる軍政大権に関してはその運用に国民の意思を反映すべきであるという統帥権解釈が、統帥権の干犯であり、元来天皇のみが発議権を保有すべき帝国憲法の改正を私議することであり、臣民の身分として許すべからざる凶逆思想である、⑤共産主義思想にも思想言論の自由を認めて共産党も合法政党として承認すべきであると説いたことは、治安維持法によって取り締まりの対象とされている共産主義思想に賛成してこれを擁護するものである、河合は共産主義者と選ぶところなき危険思想家である、⑥河合の「第三期自由主義」はまさに一種の社会主義であり、私有財産制の撤廃を主張する点において共産主義と同一のものである、という内容のものであった<sup>100</sup>。

特に、検事が攻撃してきたのが河合の『ファシズム批判』で展開されたその国家観についてであった。河合は同書で、唯一の「全体社会」（「共同体社会」）（community）は「国民」であり、それ以外の社会はすべて

<sup>99</sup> 蠟山政道『叢書名著の復興7・日本における近代政治学の発達』（1968年、新泉社）179頁。  
また、山下重一「河合榮治郎」、田中浩・小松茂夫編『日本の国家思想（下）』（青木書店、1980年）239-243頁。

<sup>100</sup> 木村健康「河合榮治郎の生涯と思想」、社会思想研究会編、前掲書、1948年、115-117頁。



「部分社会」(association)で、「国家」もまた秩序維持という特殊目的を有する「部分社会」であるとした。さらに、河合は、同書で、「国家」という「部分社会」は教会、大学、労働組合、政党などの他の「部分社会」と基本的には対等の立場であると論じた。河合はいう。

「社会の中でその目的の一般的包括的なものを共同社会〔全体社会〕と云い、国民が現代の唯一の共同社会である。その目的の一部的局部的なる社会を部分社会と云い、団体とは部分社会を意味する別名である。共同社会ならざる社会はすべて部分社会であり、国家、教会、大学、労働組合、政党階級の如き、又世界人類の如き何れもそれである。部分社会それぞれ特殊の目的を有するが、教会は宗教を、大学は研究と教育とを、労働組合は労働者の生活条件の維持改善を目的とする。特殊の目的の為に構成される部分社会は、全体社会のそれぞれの側面を担当して、全体社会と共に各個人の人格成長の為に必要なる職能を果たしつつある。人は国家を以て全体社会なりと云うかも知れない。然し国家も亦一つの部分社会に止まり、唯その目的が秩序の維持に存し、従って命令強制の権力を所有することに於て、他の部分社会と異なるに過ぎない。従って**国家が之等の部分社会の王座に位して最高の価値を有するのではなく**、国家はその目的たる秩序維持と云う点から、教会や大学や労働組合等に干渉することは当然であるが、秩序維持に関係しない限りに於て、教会も大学も組合もそれぞれの特殊の目的を遂行することに就いて、敢えて国家が部分社会たることと異なることなく、その下位に立つべきものではなく**対等の立場**に在り、国家からの干渉は唯秩序維持の一点に止まり、他の点に於ては教会は宗教に就いて、大学は真理の探究と学生の教育とに就いて、全く自由なるべきである。」(強調－引用者)<sup>101</sup>

そして公訴事実、こうした国家観が「我が国民の伝統的国家観を非難論難を延いて国民の義勇奉公の念に動揺を來たさしむる虞れある」とした<sup>102</sup>。これに対し、河合は裁判において、『ファシズム批判』での内容

<sup>101</sup> 河合榮治郎『ファシズム批判』、『全集』第一一巻、360頁。

<sup>102</sup> 「裁判記録」、「第二章 予審請求書」、『全集』第二一巻、23頁。

を洗練化かつ発展させる形で修正を施した<sup>103</sup>。まず、河合は法廷での反駁のなかで、「全体社会」と「部分社会」との関係について、「全体社会」の「国民」が「同胞の人格の成長」という目的を十分に果たすことができるように、「部分社会」の「国家」が「命令強制の権力」を行使すると説明し、「全体社会が目的で部分社会が手段である、従って〔両者は〕上下の地位」にあり、「今日に於ては全体社会が目的で部分社会が手段であるということをはっきり申し上げて差支えないと思います」<sup>104</sup>と断ずる。また、河合は「全体社会」と「部分社会」の関係を天皇にも応用し、天皇の役割を、統治権を総攬する「部分社会に於ける元首」と「全体社会に於ける国民の感情の対象」との二つの側面に求める。そして後者に関して、河合は「天皇の聖慮とせられることは一億の臣民の人格の成長でありまして、一億の臣民が人格の成長をすることが上御一人の聖慮であらせられ」、その結果、「臣民の天皇に対する感情は崇敬即ち崇拜と尊敬、崇敬という形にまで凝り固ま」り「斯かる崇敬の感情の対象に立たれるところの天皇は、何等強制されることなく自然に流れる国民感情の上に立た」れるようになり、ここに「日本の国体の精華の一つがある」と論ずる<sup>105</sup>。さらに、河合は、以上のことを日本史上における天皇と政治の関係に触れながら次のように説いている。

「日本の歴史に於て或る時に天皇が政を親せられたこともございますけれども、併し藤原氏、平氏、源氏、北条氏、足利氏、織田氏、豊臣、徳川というようなものが政権を執っております間は、色々政権の主体が変化しておりますけれども、これは部分社会としての国家に於ける変化で、而も国民という全体社会に於きましては、天皇が国民感情の中心に立たせられたということに於ては、終始二千数百年一貫して変わらないわけである。（中略）終始一貫して日本の歴史は統一性を維持していると考えerわけは、

<sup>103</sup> ただし、後に詳しく検討するように、河合のこうした主張の変化を河合自身の思想の内在的「発展」と見るか、あるいは単なる「転向」「変節」と見るかが、現在の河合研究における一つの論点となっている。

<sup>104</sup> 「裁判記録」、「第三章 公判記録」、『全集』第二巻、59頁。また、58-63頁も参照。

<sup>105</sup> 同上書、73-74頁。

部分社会にその統一性がなくて寧ろ国民という方の全体社会に統一性があるからだと解釈ができるのだと思うのであります。」<sup>106</sup>

また、こうした河合の国家論は、前述の「平賀肅学」の際に河合に対する処分に抗議し、「飢えても此の信念は曲げたくない」として辞表を提出した河合門下生の、特別弁護人木村健康によっても次のように解説されている<sup>107</sup>。

「〔被告河合の主張では、〕共同社会に所属する各員は自他の人格完成を最高の目的としているのであるから、共同社会は明らかに**倫理的意義を有する社会**であって、かりにその社会の目的について考えるならば、それは全般的包括的である。それ故、部分的特殊的目的を有する社会が部分社会（association, Gesellschaft）と名づけられるに対して、共同社会を全体社会（Community）とよぶのである。全体社会はこれを具体的に観れば、国民（Nation）または祖国（Vaterland）であるが、被告〔河合〕が祖国の特質として共同の歴史と文化と感情と利害との存在をあげているのは（中略）、全体社会が**倫理的**共同体であることを端的に示しているというべきであろう。蓋し、歴史、文化、感情等は人間の倫理的活動の所産にほかならないからである。（中略）〔他方、〕治安の維持を固有の目的とし、そのために権力を具うる部分社会は、国家（State, Staat, etat）とよばれる。国家は道義社会たる全体社会を基盤として、それより派生せられた部分社会であるとともに、全体社会を目的としてこれに奉仕するところの手段社会である。しかし国家を以て手段と観ることは、毫も国家の意義と価値とを貶下することではなく、却ってそれを高揚する所以である。全体社会は道義社会であり、部分社会たる国家は全体社会の必要不可欠の手段であるとすれば、国家はすなわち道義のための存在であり、人倫と正義との守護者でなければならぬ。国家の道義的意義をかほどに高潮した〔河合の〕

<sup>106</sup> 同上書、69-70頁。

<sup>107</sup> 河合榮治郎『随想集』、『全集』二〇巻、114頁。なお、この木村による抗議の辞表提出は、河合をして「立派であった」「之で吾々の同志は救われた」とさえ言わしめた（同頁）。また、松井、前掲書、2009年、302頁。

思想は、他に類例が少ない。」<sup>108</sup>

ところで、一方の「部分社会」に関しても、河合は「部分社会」相互における「国家」の地位を巡って、『ファシズム批判』での「対等」という関係から「上下の関係」へと修正した。河合はいう。

「私が国家〔部分社会〕と祖国〔全体社会〕とを区別した理由は前に述べましたが、要するに従来国家という語に囚われて、これに無批判的であった弊を矯めんとする趣旨で祖国という概念を国家から区別し、祖国の重要性を強調したのであります。然しそれぞれ特殊目的を異にして、それぞれが国民の全成員の人格の成長に役立つのでありまして、同一の目的を有するものの中には価値の区別を置くことができるかも知れませぬが、異なる目的を有するものを同一標準の下に置いて、価値の順位を決することは出来ないと思います。唯、もし目的の広汎か狭隘か、或いは目的が絶対的必要かという点を標準として価値の順位を決定しようと言うならば出来ないことはありません。国家の目的は本来は秩序維持にあります。それが徐々にとして拡張されて、今日広汎になったことは前に申し述べました。その点で現代国家の目的や職能は他の部分社会の比ではありません。また秩序維持ということは、絶対に必要で、これなくして宗教も学問も芸術もありませぬ。こういう意味で、**国家は絶対に必要であり、他の部分社会は国家の存在を前提として初めて目的を発揮することができる**と言えるので、**以上のことを標準として順位を決定すれば、国家は他の部分社会の優位にある**と言えると思います。」(強調－引用者)<sup>109</sup>

そして河合は、自らの国家観を次のようにまとめる。第一に、国家は一階級の独占のものではなく超階級的色彩をもつと考える点でマルキシズムと異なり、また命令強制権力が人格成長に必要である点で無政府主義的国家観とも対立する。第二に、全体社会を国民とし、部分社会を国家とする点で多元的国家観に近いが、イギリスではそれが経験主義の哲学に立ち、唯物論に近い説明をしている点で異なる。第三に、全体社会とし

<sup>108</sup> 「裁判記録」、「第四章 弁論要旨」、『全集』第二一卷、185-186頁。

<sup>109</sup> 「裁判記録」、「第三章 公判記録」、『全集』第二一卷、58頁。

ての祖国、国民は共通の言語、感情、文化、歴史等を共有する集団のことであり、部分社会としての国家は秩序維持を目的とし命令強制の権力を与えられた社会のことである。第四に、国家は平和を与え利己心を抑える作用があるがゆえに、国家は成員の人格の成長の条件であり、それは少しも国家を軽視することにはならず、むしろ国家に不動の道徳的根拠を与えるものである<sup>110</sup>。

#### 4. 河合の国家論(2)－『国民に懇う』・『学生に与ふ』－

こうした河合の国家観に対し、裁判では、石坂修一裁判長が「此の国家観は、国家にとりては、徒に細密に過ぎたる観念の分析を為したる為其の本質を見失われ、好ましからずとする意見或いは之あらんも、畢竟同被告人の観念、同被告人の持する哲学上の判断を出づること無く、客観的には之に因りて国家の本質自体には毫末の増減あることなし」と解釈した<sup>111</sup>。そして「本件四種の著書出版は出版法第二十七条に該当せざるのみならず、前示講演案より観たる場合を除き出版犯罪の成立に必要な犯意を欠き、結局罪と為らざるを以て、刑事訴訟法第三百六十二に依り無罪の言渡しを為すべきものとす」<sup>112</sup>として、石坂裁判長は河合に対して、当時のこの種の事件としては異例の無罪判決を下した。だが、この判決に検事局は不服として控訴院に控訴し、結局1941年10月の控訴院（小中弘毅裁判長）での判決では有罪として罰金300円が言い渡された。被告河合側は直ちに上告したが、1943年6月、大審院（三宅正太郎裁判長）において上告が棄却され、河合の有罪が確定することになった<sup>113</sup>。

ところで、控訴院公判がはじまる直前の1941年2月から、河合は『国民に懇う』の執筆に取り掛かる。これは、河合門下生の猪木正道がいうように「坐視するに忍びないという憂国の精神」がその執筆動機であり、河合

<sup>110</sup> 「裁判記録」、「第三章 公判記録」、『全集』第二巻、60-64頁。

<sup>111</sup> 「裁判記録」、「第五章 第一審判決」、『全集』第二巻、373頁。

<sup>112</sup> 同上書、402頁。

<sup>113</sup> そしてこの判決から8か月の経った1944年2月15日、戦後生きていれば恐らくは東大総長にまで上り詰めていたであろう河合は、53年のやや短い生涯を閉じることになる。

自身も「自分としては此の本は是非世に出したいと思っ」ていた<sup>114</sup>。しかし、すでに日本評論社から出版が決まっていた『国民に懇う』は、印刷も製本も完了した3月末になって内閣情報局の鈴木庫三中佐の命によって発売が差し止められることになった。猪木によれば「河合先生が国を憂える至情から、精魂をこめて書かれた最後の著書は、軍国主義の弾圧によって、闇から闇へと葬られ」ることになったのである<sup>115</sup>。

では、河合は『国民に懇う』のなかで何を語り、何を訴えていたのか。それは、出版差し止めになったとはいえ、日本国という国家優位を強烈に訴えるものであった。河合は、「はしがき」で次のように述べている。

「我々を一步一步として駆りつつある運命は、誠に日本歴史にあつて以来の未曾有の危機である。(中略)我々の祖国を守る義務に就いて、誰が疑いを抱くものがあるろう。然るに我々国民の中には、危機に面を背けようとする怯懦と臆病、最悪の状態を恐怖して之に直面しまいとする卑怯と迂闊と呑気と其の日暮し、徒に責任を他に転嫁して独りいい子になろうとする冷淡と狡さ、凡そこうしたものがないと云えるか。今日の日本の危機はなるほど、外交的、軍事的、経済的なものであらうとも要するに根本の問題は道徳的な問題である。祖国の運命に対して、奮然として起つことの出来ない国民は、道徳的の無能力者である。若し我々国民が道徳的の敗者であるならば、幸いにして戦い勝とうとも、戦勝が却って国民を頹廃と墮落とに駆るだろう。若し仮に不幸にして戦いに敗れば、再起の気力もない亡国の民となるだろう。今や我々日本国民は道徳的試練の下に立たされている。(中略)親愛なる同胞諸君、願わくば我々をして祖国の運命を男らしく直視せしめよ。我々をして幸運や神風を待ち望むことなしに、我々自らの力によって祖国の危機を救わしめよ。之が我々の祖国への義務であり、又我々自らへの義務である。」<sup>116</sup>

さらに、河合は「国民への警告」として次のようにも訴えている。

<sup>114</sup> 河合榮治郎「随想集」、『全集』第二〇巻、179頁。

<sup>115</sup> 猪木正道「解説」、『全集』第一四巻、355頁。

<sup>116</sup> 河合榮治郎『国民に懇う』、『全集』第一四巻、281-283頁。

「一言にして云えば、今日の日本には道徳的の弛緩がある。更に極言すれば道徳的の頹廃がありはしまいか。（中略）〔私はかつて、〕戦場に臨む軍人には、自己犠牲の精神がある、「全」の為に「個」を捨ててしていると書いた。（中略）私は我々同胞が本来利己的であり実利的であるとは思わない、従って軍人の船上に於ける自己犠牲が例外的なのだとは思わない。我々には「個」を殺して「全」の為に生きようとする美しき魂があると思う。（中略）職場の自己犠牲が証明するように、我々には「個」を捨てて「全」に就き得る素質はある。唯此の素質はあらゆる部面に拡充されるに至っていないのである。あの戦場の自己犠牲に、我々は同胞の魂に無限の希望を抱くことが出来る。残る問題はあの魂を発展し強化し拡大するに在る。」<sup>117</sup>

そして河合は、「本来我々の生活には、「個」の主張の許さるべき部分と、「全」の為に「個」を犠牲とすべき部分とがある」が、「今や祖国と云う「全」が重大な時期に際会している」この「非常緊急の時局に際しては、「全」の為に「個」を犠牲とする部分が、極度に拡張されて、「個」の許さるべき部分が縮小するのは、当然過ぎるほど当然である」と断じ、「「個」に執着して「全」を顧みないならば、「全」はどうなるのか、「個」も果してどうなるのか」との厳格な問いを国民に投げかける<sup>118</sup>。さらに、天皇についても、河合は次のように論ずる。

「日本の元首は、天皇であらせられる。だが天皇が万世一系の皇統を継承せられ、皇統の連綿たること二千六百年の永きに亘ったことのみが日本の天皇が万国に優越せられる所以ではない。実に天皇は日本に於て常に主権者として権威の主体として政治の中心に立たせられるのみならず、我々臣民の道義の中心として臣民に臨ませ給うのである。（中略）天皇の聖慮は常に臣民の人格の成長の上に在らせ給うた〔のである〕。（中略）祖国と云う言葉を聞く時に、人はともすれば抽象のもどかしさを感じるであろう。だが我々の祖国は天皇の象徴せられる。日本の歴史を通じて、祖国の危難が迫った時に、国民の眼は常に京都の朝廷を仰視した。我々が之からの荊

<sup>117</sup> 同上書、306-307頁。

<sup>118</sup> 同上書、308-309頁。

棘の道を歩むにつれて、我々の眼は幾度か天皇を仰視することがあろう。そしてそこに国民の結成が強められ、国民の前進が早められるであろう。」<sup>119</sup>

河合が自ら強く出版を望んでいた『国民に懇う』での主張は、このように極度に国家優位、全体優先の議論となっており、国体擁護・天皇崇拜の彼の主張からは「戦闘的自由主義者」の面は著しく後退している。この点は、『国民に懇う』執筆の前年の1940年に刊行され、『国民に懇う』がいわばその姉妹編にあたるどころの河合の大ベストセラー『学生に与ふ』のなかにも確認できる。河合は、「一旦緩急あらば、我々は財を捨て命を抛たねばならない」と記して、以下のように述べている。

「学生諸君、我々の祖国日本は今、非常な難局に立っている。(中略)此の非常時局に際会した諸君は、いかに祖国に仕えるかに就いて、夙に覚悟を持って居られることと思う。若し祖国の危急が諸君を呼ぶならば、諸君は勇んで戦線に銃を執らねばならない。」<sup>120</sup>

こうした主張も河合の思想の一端であることは、彼の思想に統一的な見方を下す場合には強く意識されなければならない。

### 第3章 河合榮治郎とB・ボザンケー比較検討－

#### 1. 河合・ボザンケ・多元的国家論(1)－河合に対するボザンケの思想的影響－

以上、河合の国家論を概観してきた。ところで、河合が裁判のなかで、また裁判以降にこうした国家優位の思想を「突如」唱えたことを巡っては、これまでの河合研究において様々な解釈が示されてきた。特に、「全体社会」としての日本国全体を高く称揚したこと、また国体護持・天皇崇拜を訴えたこと以上に、前述のように、河合が裁判で、いわば政治理論・国家理論として、「部分社会」である「国家」が他の「部分社会」と「対等」であることを修正し「国家」を他の「部分社会」より優位に捉えたことは、

<sup>119</sup> 同上書、318-319頁。

<sup>120</sup> 河合榮治郎『学生に与ふ』、『全集』第一四巻、15頁。



河合の「戦闘的自由主義者」との通説的評価を覆す可能性を秘めているがゆえに、これまでの河合研究の論点となってきた。そして、この点を巡って、以下の4つの解釈が河合研究者によって示されてきた<sup>121</sup>。

第一に、「国家が他の部分社会よりも優位であることを認めることは、多元的国家論の破綻ではないのか」、「自由主義、個人主義の思想の後退にならないか」とする立場、すなわち、単に河合が自由主義を放擲し、ヘーゲル的国家観へと「変節」したとする説である。第二に、戦時下の特殊状況下で、国家的意向に逆らって自己の思想を抹消させるよりも、国家的統制に服することを示すことによって、理想主義・自由主義思想を温存させる道を選んだとする、いわば「生きるための方便」としての「仮の変節」説とでもいうべき立場である。第三に、河合の国家観は多元的国家論がすべてではなく、多元的国家論はいわば全体の一つであって、全体は「国家の哲学的理論」というべきものであるとする説である。そして第四に、河合自身の多元的国家論そのものの考え方から帰結する立場で、全体社会としての本質は祖国主義、愛国主義であるから、いったん国家に緊急の事態が発生した場合は、部分社会としての各組織、機関間の並立同等の関係は崩れて、治安維持を主任務とする国家が他の組織、機関よりも最優先の地位に立つことを要請する立場、すなわち「国家存亡時での愛国主義的要請」説である<sup>122</sup>。

以上の4説に関して、現在の河合榮治郎研究の牽引者である松井慎一郎は、上記の第二の立場をとっている。松井は、河合がかつて『ファッシズム批判』で「国家」は他の「部分社会」と同等の地位にあるとしたのに対して、裁判では「国家」をより優位の地位に捉え直した点に河合の思想的变化を見、その理由を「戦争の時に憲法さえも戒厳令を布いて一時停止するわけなのであります。その時に未来の改革を唱道する自由主義、社会主義の要求が事変最中に於いて停止するということは自明のことで、言うを

<sup>121</sup> 4つの解釈については、青木、前掲書、2011年、293-294頁参照。

<sup>122</sup> 同上書、294-295頁。

俟たないことだと私は思うのであります」<sup>123</sup>との河合の言明を引用しつつ、次のように分析している。

「以上のような発言は、「国家」の優越的位置（中略）を容認するものであり、かつて、個人・人格の尊重を強く訴え、そのための社会改革を主張してきた理想主義的社会主義者の面影は薄らぎつつあるように思える。しかし、それは、（中略）戦時体制という非常時局を念頭に置いてのものであった。（中略）〔河合は、〕戦争勃発以前には、「国家」と他の「部分社会」を同列であると説くことで「国家」の干渉を防ごうとしたが、戦時体制下では、「国家」による統制はもはや否定できず、それをあえて認めることで、自らの多元的国家論の健全さを主張し、他の「部分社会」の存在意義をできるだけ主張しようとしたのである。」<sup>124</sup>

つまり、松井は、河合の上記のような国家主義的、現状追従的な主張は、あくまで非常時におけるやむを得ない方便的主張であり、むしろ、1940年代の大政翼賛会や大日本産業報国会などの結成に伴う「部分社会」の解消の時期にあっても、あくまで「部分社会」を擁護しようとした点に河合の多元的国家論者の本領がある、とみるのである。

しかし、河合の裁判での国家優位の主張は、果たしてこのように一時しのぎ的で例外的な主張だったのであろうか。私見によれば、河合の思想体系からは大きく逸脱し、河合の自由主義思想とは無関係な、いわば「異常な思想」が、いくら方便とはいえ、この期に及んで突如現出したとみるのは適切ではないだろう。ましてや、それが河合自身が唱えたといわれる「戦闘的自由主義」とはおそらく正反対のものと位置づけられ得る「現状追従的・体制擁護的」な国家主義であるとすれば、なおさらでそうであると指摘できよう。そうであるならば、河合の上記のような国家優位の主張は、別段、非常時でなくても、あるいは方便としてではなくても、すでに河合自身の思想のなかに組み込まれ、あるいは沈潜しており、それと多元的国家論および「戦闘的自由主義」との一応の「整合性」が河合のなかでは保

<sup>123</sup> 「裁判記録」、「第三章 公判記録」、『全集』第二一卷、130頁。

<sup>124</sup> 松井、前掲書、2009年、310-311頁。

たれていたと考えるべきであろう。つまり、戦争勃発を契機に河合自身の思想に変化が生じたと仮定すること自体が疑われるべきなのである。

では、こうした思想、すなわち一面で人格の成長を訴える個人主義的側面を持ち、他方で、諸集団（「部分社会」）の調整を行う「国家」と「全体社会」としての「国家」を同時に高く称揚する思想を保持し、それを最も強く打ち出したイギリス理想主義の思想家は誰かと問われれば、それが同学派最大の国家論者であるボザンケにほかならない。つまり、ボザンケ流の哲学的国家理論の影響が決して少なくない程度で、河合の思想のなかに見られるとあってよい。むしろ、河合の国家論には、前述のように多元的国家論の強い影響が見られる。しかし、河合が単にイギリスの多元的国家論の模倣者ではなかったことは、河合自身によっても、その相違点とともに、次のように指摘されている。

「次に第一次の欧洲大戦の前後にイギリスに現われました所謂多元的国家観と申しますのが全体社会と部分社会を分けまして、全体社会を国民と言ひ、部分社会を国家と申しております。やや私の見解に近いものでありますが、これらの多元的国家観、或いは職能的国家観が右翼から左翼まで学派が色々分かれておりますが、いずれも経験主義的、自然主義的の哲学の上に立っているひとでありまして、これらの人の全体社会と部分社会とを分けたことは私に近いのでありますが、人格というものを以て二つを説明し通したということが私の特徴でございまして、所謂英国の多元的国家論者は人格というような観念を持ち出しておりませぬ。寧ろ唯物論者に近いような説明をしているわけであります。そこで私と違うわけでありませう。」<sup>125</sup>

つまり、イギリス理想主義の側面を多元的国家論に含ませていることに自らの独創性があると河合自身は分析するのである。それゆえ、多元的国家論の側面をもちつつも、河合の国家論にはなおボザンケおよびグリーン

---

<sup>125</sup> 「裁判記録」、「第三章 公判記録」、『全集』第二一卷、60-61頁。

に強く引きつけられ、そしてイギリス理想主義の国家理論の大成者こそボザンケであったことから、河合は多元的国家論を唱導しながらも、同時にボザンケ流の哲学的国家理論をも主張することになったと考えられる。実際、この点は木村健康の次のような弁論要旨において明確に指摘されている。

「以上によって明かなように、被告河合の国家観は多元的国家観としての側面が具わっている。西欧において多元的国家観の濫觴は遠いけれども、比較的近代では部分社会たる国家を全体社会たる祖国または国民の手段と観る思想家は、多元的国家観の直接の先蹤である。(中略) 本来の多元的国家観は、この思想を基とし主として英米に発達したものであるが、その代表者としては社会学者マックイーヴァー (MacIver)、政治学者パーカー (E. Barker)、ラスキ (H. Laski)、その他コール (Cole)、フィギス (Figgis) 等を数えることが出来る。我が国においても現在多元的国家観は支配的であって、ほとんど社会学界、政治学界の通説であるかの観がある。(中略) 多元的国家論者は齊しく国家を一部分社会と考えるものの、この国家の重要性についてはあるものは国家を重視し、あるものはこれを軽視しようとする。マックイーヴァー、パーカーなどは前者の例であり、ラスキは後者の例である。本邦多元論者においては西欧に比して比較的国家を重視するものが多いけれども、なお被告河合の国家尊重論に遠く及ばないのである。同じ多元的国家論に立ちつつ被告河合は如何なる根拠に基づいて、他の学者に見られない国家尊重論を唱導したのであろうか。一般に多元論者は社会学者であることが多く、多元的国家観は国家の社会学的理論 (The Sociological Theory of the State) といわれるが、被告河合の国家論が多元論的を有するの故をもって、河合もまた国家の社会学的理論の支持者であると考えれば、甚だしい誤りである。多元論は被告河合の国家論の一側面に過ぎず、被告国家観の本領たり枢軸たるものは、実に国家の哲学的理論 (The Philosophical Theory of the State) にあるものである。被告河合の哲学的国家論は、トーマス・ヒル・グリーンに由来し、グリーンを通じてフィヒテ、ヘーゲルに連なり、さらに古代ギリ

シャのプラトンにまで溯り、その根本思想は国家の道徳的意義を明らかにするにある。被告はこの国家哲学を核心とし、これに近代的国家観たる多元論を結合し、見事な統一的国家観を樹立したのである。そうしてここに被告の国家観を他の学者のそれと区別すべき重要な特徴がある。」（強調－引用者）<sup>126</sup>

こうして、木村はボザンケの主著の題名と同じ「哲学的国家理論」という言葉を用い、河合の国家観をあくまでイギリス理想主義に基づくものと弁明する。確かに、ここで登場する名前はグリーンでありボザンケではないが、しかし河合がボザンケをグリーンの思想面・実践面を継承する弟子と見ていたこと、そしてグリーンの思想を国家論として血肉化した思想家がボザンケであったことを考えれば<sup>127</sup>、河合の思想にボザンケの影響を看取するのは妥当な見方であろう。この点は、官吏時代に味わった河合の知的欲求が『国家理論』によって満たされたこと、河合のボザンケ研究がヘーゲルよりもグリーンに近いボザンケ像を提示するものであったこと、河合自身がグリーンを除いてはボザンケ以上に完全な国家理論が展開されなかったと指摘していたこと、河合がボザンケの国家主義を批判の対象にはしていなかったこと、河合がすべての国家主義を否定した訳ではなくボザンケ流の国家主義は容認していたこと、河合自身が裁判の公判において「全体社会」（共同社会）としても「部分社会」としても国家は極めて優位な立場にあると明言したこと、そして何よりも、河合の国家論が「国家は超階級的的色彩をも」ち、「人格成長に必要」な「条件」であり、かつ「不動の道徳的根拠」をもつと述べて、「国家」を「絶対的権力を保持する一つの共同社会」であり「文明生活における必須のファクター」<sup>128</sup>と位置づけていたボザンケの国家論に急接近していることから理解できよう。

<sup>126</sup> 「裁判記録」、「第四章 弁論要旨」、『全集』第二一巻、186-187頁。なお、引用文中の強調箇所のみで、「一側面」の部分は木村も強調している。

<sup>127</sup> Robert Pearson and Geraint Williams, *Political Thought and Public Policy in the Nineteenth Century* (London and New York: Longman, 1984), p. 153.

<sup>128</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20 vols.*, Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol.V, *The Philosophical Theory of the State, Fourth Edition*, p.158, 172.

この点は、河合の『国民に懇う』で示された国民への訴えが、以下のようなボザンケの第一次世界大戦期のイギリス国民に対する訴えと酷似していることから把握できよう。ボザンケはいう。

「無論、強くあることは個人の義務であるように国民全体の義務である。それは単なる予防措置や保険以上のものである。それは個人の人間性ないし発展の一部であり、また国民全体の尊厳の一部である。」<sup>129</sup>

「我々は反省すべきである。(中略)我々是我々の国を欲しているであろうか、そして我々自身、我々が知る最善のもの、つまり美や真理や愛や健全な生活というものを欲しているであろうか? こうした絶対確実な価値基準によって我々が、我々自身をそして我々の国を、戦争の究極的な原因たる墮落した利己主義にあらがって守ろうとしているであろうか?」<sup>130</sup>

ボザンケは、前述のように、「国際連盟」や「世界国家」への期待を保持してはいたが、河合と同じく、現実には戦争の危機や国難が生じた場合の国民のあるべき姿、心構えについてこのように語っていた。こうした主張と、河合が自ら進んで出版を希望した『国民に懇う』での主張との近接性は明らかであろう。

以上から、河合の国家論の内的整合性を別にすれば、河合の思想にグリーン、ラスキ、ホブハウスらと並んでボザンケの思想、特にその哲学的国家理論が影響を及ぼしていたと指摘することは可能であろう。

## 2. 河合・ボザンケ・多元的国家論(2) —筆者(芝田)への批判にこたえて—

ところで、本論文とは別に、以前に筆者(芝田)は、やや荒削りな形でボザンケの河合に対する影響を指摘したことがあったが<sup>131</sup>、その後、この点についての批判が、とりわけ哲学的国家理論と多元的国家論との関係

<sup>129</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet*. 20 vols., Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol. XV, *Social and International Ideals*, p.12.

<sup>130</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet*. 20 vols., Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol. I, *Selected Essays*, p.283.

<sup>131</sup> 芝田秀幹「河合榮治郎のイギリス理想主義研究」(『政治学研究論集』第10号、1999年) 37-56頁、同「河合榮治郎とB・ボザンケ」、河合榮治郎研究会編、前掲書、2002年、209-234頁。

を根拠にして寄せられた。筆者としては誠に望外の喜びというほかはないが、ただしその主張には首肯しがたい点も含まれているので、ここで改めてこの点について検討してみたい。

筆者に対する批判とは、前述の河合の国家観を巡る4つの立場に関して第三の立場を筆者が採用していることに対してであった。すなわち、その批判とは、「多元的国家論自身がボザンケの同書を反駁するために出てきたものであり、河合自身が多元的国家論を提唱している以上、河合が『国家の哲学的理論』と同じ立場にあるとは考えられない」<sup>132</sup> というもの、また「河合はボザンケをある程度は評価している」ものの、「しかし、これをもって、河合がボザンケ理論を多元的国家論以上に評価しているとは見なし難い」というものであった<sup>133</sup>。

しかし、こうした主張には必ずしも妥当とは思われない点が含まれている。まず、多元的国家論はボザンケの政治思想への反駁から出ていると批判者は指摘するが、この指摘は一面で正しいものの、両者を全くの別物、あるいは完全に敵対・相対立するものと理解し、両者の間に何らの思想的類縁を認めようとしなないのは誤りである。というのは、そもそも、様々な多元的国家論者の思想を十把一絡げに捉えること自体が誤りであり、多元的国家論について論ずる場合は、その論者の間の国家観を巡る微妙な相違点にも目を光らせ、そのうえでそれらとボザンケの政治思想との距離を正確に測定し、かつ彼らとボザンケとの関係を各々検証すべきなのである。この点は、辻清明もかつて指摘しており、多元的国家論の学説の内容は必ずしも同一ではなく、特に国家が他の社会団体（河合のいう「部分社会」）と比べて、どれほど特殊な機能をもち得るかという点で諸々の差異がある<sup>134</sup>。また、この点は法廷で木村によっても、前に引用した弁論要旨のなかで以下のように指摘されていた。

「多元的国家論者は齊しく国家を一部分社会と考えるものの、この国家

---

<sup>132</sup> 青木、前掲書、2011年、294-295頁。

<sup>133</sup> 同上書、300頁。

<sup>134</sup> 辻清明「現代国家における権力と自由」、『世界の名著72 バジヨット・ラスキ・マッキーヴァー』（中央公論社、1980年）48頁。

の重要性についてはあるものは国家を重視し、あるものはこれを軽視しようとする。マッキーヴァー〔マッキーヴァー〕、バーカーなどは前者の例であり、ラスキは後者の例である。」<sup>135</sup>

では、河合の「全体社会」と「部分社会」に関する議論は、それが裁判闘争の過程で「全体社会」としても「部分社会」としても国家がより優位な立場を占めるものであることが明らかになった以上、思想面での「国家」との距離という点において、西欧の誰の多元的国家論に相似しているのであらうか。この点について、私見によれば、河合の議論は、マルクス主義的で「反国家的」なスタンスをとったラスキ<sup>136</sup>、あるいはコール(George Douglas Howard Cole: 1889-1959)ではなく、国家により強い機能を認めて国家に一定程度の優位を与えた、上記のマッキーヴァー(Robert Morrison MacIver: 1882-1970)、ないしバーカー(Ernest Barker: 1874-1960)のそれに近いものと思われる。実際、ラスキは権利、正義、国家の活動、国家のもつ能力、国家に対する信仰などを問題にして、他のいずれの多元的国家論者よりも鋭く国家権力の強大化を批判し、国家権力にかなりの程度の制限を課し、国家権力から自律した集団を描出した一方で<sup>137</sup>、マッキーヴァーはあくまで「国家」と「社会」=「コミュニティ」との区分、河合の言葉で言い直せば、「部分社会」としての「国家」と「全体社会」としての「祖国」「国民」との区分を問題にして、左翼的な議論を展開することはなかった<sup>138</sup>。

また、河合は自己の多元的国家論で様々な概念を駆使しているが、そのなかでも恐らく最も重要と思われる概念、すなわち「全体社会」(community)・「部分社会」(association)・「国家」(state)の3概念は、マッキーヴァーの示す「コミュニティ」(community)・「アソシエーション」(association)・

<sup>135</sup> 「裁判記録」、第四章 弁論要旨、『全集』第二巻、186-187頁。また、辻、前掲書、1980年、48頁。

<sup>136</sup> George H. Sabine, *A History of Political Theory, Third Edition* (London: George G. Harrap & Co. Ltd.), p.846.

<sup>137</sup> 藤原保信『二〇世紀の政治理論』(岩波書店、1991年)37頁、小松敏弘『現代世界と民主的変革の政治学—ラスキ／マクファースン／ミリバンド』(昭信堂、2005年)65頁。

<sup>138</sup> 町田博『マッキーヴァーの政治理論と政治的多元主義』(東信堂、2005年)88頁。



「国家」(state)の3概念と完全に符合しており、それはラスキやコールといった反体制的多元主義者のそれらとはもちろんのこと、河合と同じく国家に対して好意的な態度をとった多元的国家論者パーカーの「国家」(state)・「社会」(society)・「集団」(association)の3概念とも異なっている<sup>139</sup>。

さらに、マッキーヴァーは、「国家」は「アソシエーション」(河合の言葉では「部分社会」)であり、その「国家」を生み出したのは、「アソシエーション」の背後にある「コミュニティ」(河合の言葉では「全体社会」)であると論ずる。マッキーヴァーいわく、「国家にはコミュニティの結集した力が背後にあ」<sup>140</sup>り、「コミュニティは、いかなる国家よりも以前に存在していた。国家を徐々に形成したものは、コミュニティにおいて、国家を創設しようという、ゆっくりと発展してきた人びとの意志である」<sup>141</sup>。しかし、「国家」は「コミュニティ」(「全体社会」)よりも小さく、「コミュニティ」よりもあとに誕生する「国家」＝「アソシエーション」(「部分社会」)ではあるものの、「アソシエーション」(「部分社会」)のなかでは最も大きなものである。マッキーヴァーはいう。

「この最大のアソシエーション〔国家＝「部分社会」〕は、コミュニティの利害の調整を意味している。それによって、最大のアソシエーションである国家は、それ自体、コミュニティ内の絶え間ない部分的な衝突(これは膨大かつ終わりのない問題である)を考慮しつつ、しかしなおかつ、こうした衝突によって破壊され得ないより大きな共通の利益を考慮する(これは漸次的に解決できる問題である)ものとなるのである。」<sup>142</sup>

「国家は、最大のアソシエーションである。なぜなら、それは特有の政治的な方法で、一定のコミュニティの、最大かつ承認された共通利害全体

<sup>139</sup> 多元的国家論者の提示した諸概念の微妙な相違点については、梶沢栄一「イギリスにおける政治的多元主義の諸相－E. パーカー、G. D. H. コール、H. J. ラスキの政治思想を中心に－」(『埼玉女子短期大学研究紀要』第12号、2001年)17-31頁参照。

<sup>140</sup> R. M. MacIver, *Community: being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*, Third Edition (London: Macmillan, 1924), p.32.

<sup>141</sup> *Ibid.*, p.130.

<sup>142</sup> *Ibid.*, p.126.

を擁護するからである。」<sup>143</sup>

こうして、マッキーヴァーは「コミュニティ」(「全体社会」)と「アソシエーション」(「部分社会」)という二つの形態を説き、前者が最も大きく、後者は「コミュニティ」(「全体社会」)によって生まれた機能的・限定的な社会であること、そのうえでなお「アソシエーション」(「部分社会」)としての「国家」は、「コミュニティ」ではないもののしかし「アソシエーション」(「部分社会」)のなかでは最大のものであることを説くのである。

以上のように、国家に関して積極的な役割ないしその優位性を認めたマッキーヴァーの多元的国家論が、その論法や概念操作などの点でも河合の多元的国家論に極めて近似していることは指摘するまでもないであろう。そしてこの観点から先ほどの河合とボザンケの関係についての指摘に戻れば、それは実際にはマッキーヴァーの多元的国家論とボザンケの哲学的国家理論との関係についてほぼ述べたものであることが理解されよう。

ところで、筆者(芝田)は、以前にボザンケの哲学的国家理論とマッキーヴァーの多元的国家論との関係を検証した際に、両者の思想的関係もまた、実はお互いの否定の上に成り立つ厳しい敵対・対立関係ではなく、お互いが批判を受け入れ、お互いが自説に修正を施し、お互いが思想的に成長し得た真にアカデミックな関係であったこと、それゆえ両者の思想にはお互いの影響がみられ、かつ相違点とともに共通点もまた多くみられることを明らかにした<sup>144</sup>。また、それゆえ、ボザンケとマッキーヴァーの思想を哲学的・一元的国家論と多元的国家論とに、いわば「教科書」的でないし形式論理的に単純に区別するのは謬見であり、むしろ両者の論争を通じて、ボザンケの政治思想のなかにすでに多元主義的要素、すなわち多元的国家論の萌芽を見ることのほうが重要である、とも論じた。実際、この点は、ボザンケがマッキーヴァーとの論争後に、「集団」、すなわち河合のいう「部分社会」に着目した「新個人主義」(a new individualism)を、次の

<sup>143</sup> *Ibid.*, p.110.

<sup>144</sup> 芝田秀幹「B・ボザンケとR・M・マッキーヴァー」(『沖縄法学』第37号、2008年)34-81頁参照。

ように提唱していることから明らかである。

「ただし、群集 (crowd) の観念は完全に過去のものである。(中略) 我々は、様々な集団を通じて芽生える新個人主義を必要とするであろう。国家のメンバーは—それが人 (person) であろうと諸集団であろうと—群集の単位ではなく、様々な集団の体系において実現されかつ顕現した充実した個人であり、多面的な活動 (activity) であろう。」<sup>145</sup>

つまり、繰り返せば、ボザンケの政治理論には、それが一元的国家論であるとの通説とは反対に、いわば「集団」「部分社会」を重視する多元的国家論の要素が内包しており、多元的国家論との思想的な連続性が彼の理論には伏在しているといえるのである。実際、ボザンケの政治思想の研究者である前出のヴィンセントは、バーカーの多元主義の発想をもボザンケに由来すると指摘しており<sup>146</sup>、またチャップマン (John W. Chapman) および田村浩志も、ボザンケの政治理論にバーカー、そして同じく多元的国家論者であるリンゼイに先行する多元主義的な要素を見出している<sup>147</sup>。さらに、三戸公や榎本世彦も、アメリカのユニークな多元主義者であるメアリ・P・フォレット (Mary Parker Follett: 1868-1933) の書『新しい国家』(The New State)<sup>148</sup> もまた、ボザンケの政治理論に多くを負ったものだと指摘しており<sup>149</sup>、実際、フォレット自身も、自らの多元主義思想を生み出す契機となった「国家を崇拜し、個人を無視する」

<sup>145</sup> *The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20. vols.*, Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol. V, *The Philosophical Theory of the State, Fourth Edition*, pp. lviii-lix.

<sup>146</sup> アンドルー・ヴィンセント、森本哲夫監訳『国家の諸理論』(昭和堂、1991年) 270頁。

<sup>147</sup> John W. Chapman, "Voluntary Association and the Political Theory of Pluralism", in J. Roland Pennock and John W. Chapman (eds.), *Voluntary Associations* (New York: Atherton Press, 1969), pp.95-97. また、田村浩志『集いと語りのデモクラシー—リンゼイとダールの多元主義論』(勁草書房、2002年) 103頁。

<sup>148</sup> M・P・フォレット、榎本世彦他訳『新しい国家—民主的政治の解決としての集団組織論』(文眞堂、1993年) 第28-33章、および解説373-376頁。

<sup>149</sup> 三戸公・榎本世彦『フォレット、経営学・人と学説』(同文館、1989年) 125頁、註12)。実際、ボザンケも、フォレットの『新しい国家』は、「近隣という集団の扱いにおいて、私の『哲学的国家理論』に「依拠」するものであるとしている。*The Collected Works of Bernard Bosanquet. 20. vols.*, Edited and Introduced, by W. Sweet (Bristol: Thoemmes Press, 1999), Vol.V, *The Philosophical Theory of the State, Fourth Edition*, p.xvii.

思想＝一元的国家論に対する責任を、ボザンケにではなく、ボザンケを「誤って解説している人々」にその責任を求めている<sup>150</sup>。

以上を踏まえれば、多元的国家論がボザンケの政治思想に対する反駁から生まれたものだとする指摘は、一面では確かに正しいものの、それゆえに両者を完全に隔離・区別して考察して、両者を貫く思想的な共通点やその類縁性を認めようとしないのは妥当ではないといえよう。

また、それゆえ、河合が多元的国家論を踏襲しているから河合の思想とボザンケの思想とは「相容れない」、と断ずるのも再考が必要となろう。実は、河合の多元的国家論がマッキーヴァーのそれとほぼ同一であることが判明した以上、こうした判断はむしろ反対であるともいえ、上記のボザンケとマッキーヴァーとの思想的交流やその類縁性、さらにはボザンケの政治思想自身に潜在する多元主義的要素を考慮すれば、ボザンケと河合の多元的国家論とは「相通ずる点がある」、あるいは「必ずしも相容れないものではない」と判断するのが自然であろう。つまり、河合の著作を通じて、ボザンケの哲学的国家理論とマッキーヴァーの多元的国家論との「反目」と並んで、「共振」の側面が浮かび上がっているのである。しかし、前出の筆者への批判は、「多元的国家論はボザンケの思想と対立する」、「河合は多元的国家論を展開している」、「したがって河合はボザンケと対立する」という形式論理に則ったうえでの判断に過ぎない。それゆえその批判は「河合－ボザンケ（哲学的国家理論）－マッキーヴァー（多元的国家論）」という思想上の“トライアングル”的な関係のなかでの複雑な知的かつ思想的な「化学反応」を等閑視した、一種の形式論に基づくものであるといえよう。

## 結びにかえて

以上、河合榮治郎とボザンケとの関係を詳しくみてきたが、そのなかで明らかになった点のうち、特に重要であると思われるのは、河合が研究者

<sup>150</sup> フォレット、前掲書、1993年、166-167頁。

の立場から、ボザンケの政治思想・国家思想をイギリス流の個人指向的、自由指向的、社会改良的なものと理解し、その思想をヘーゲル主義とは一線を画す独特の国家主義と見なしていたことが挙げられよう。筆者（芝田）としては、最近のボザンケ研究の成果を踏まえれば、前述のように、河合がボザンケの政治思想を国家主義と断じたのには若干の違和感を覚えるが、しかし河合は同時にヘーゲルとボザンケとの思想的乖離ないし質的相違をいち早く指摘し、浮田和民、大島正徳、蠟山政道らによるものを除いては先行研究が皆無という時代的な制約のなかで<sup>151</sup>、今日の研究成果と大筋で合致するような成果を提示し得たことは、河合の研究者としての本領、ないし慧眼ともいうべき鋭い洞察力を示すものといえ、この点は今後の河合研究において記憶されるべき点であろう。

また、思想家としての河合榮治郎が、多元的国家論を支柱としながらも、ボザンケ流の哲学的国家理論を吸収し、そのことによって河合事件の裁判の過程でより国家主義的な立場を鮮明にし、一面でこうした強烈な国家志向的な主張を潜在的に持ち合わせていたことは、今後の河合研究において記憶されるべき点であろう。確かに、河合自身の政治思想には多元的国家論の要素が多く含まれているが、しかしその理論的枠組みのみに河合の広範な思想を排他的に当てはめることは、河合の政治思想における「哲学的国家理論」的な側面を無視し、その結果、真の河合像を歪めることになりかねない。むしろ、私見によれば、19世紀から20世紀初頭にかけてのイギリスの思想的状況、すなわちボザンケの哲学的国家理論、マッキーヴァーらの多元的国家論、ホブハウスの新自由主義、そしてラスキの社会主義等の思想が複雑に交錯した情景が、ひとり河合自身の思想に広く具現・投影され、その結果、それらの思想が河合自身のなかで、よくいえば「多種多様」「バラエティ」に、悪しざまに言えば「異種混交」「ハイブリッド」に

<sup>151</sup> 浮田和民『ボザンケー氏国家哲学』（東京専門学校出版部、1903年）、大島正徳『哲學講座』第十三巻（誠文堂、1931年）、蠟山政道「英国理想哲学の発達（上）」（『国家学会雑誌』第35巻第3号、1921年）、同「英国理想哲学の発達（中）」（『国家学会雑誌』第35巻第5号、1921年）。なお、蠟山の研究も河合のそれと同じく途中で終了している。

<sup>152</sup> 河合の門下生であった関嘉彦も、今から40年以上前に、河合の国家思想における種々の混乱ぶりを指摘している。「座談会・河合榮治郎伝をめぐって」（『社会思想研究』第23巻第2号、1971年）12-14頁。

併存することになったと考えるべきであろう<sup>152</sup>。思想家としての河合は、この意味で、善きにつけ悪しきにつけ、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイギリスの「思想風景」そのものをストレートに具現した思想家であるといえよう。この点もまた、今後の河合研究で看過されてはならないであろう<sup>153</sup>。

ところで、河合のボザンケ研究は彼の研究者としての本領を発揮した優れたものであったが、しかしながら河合が剔出したボザンケ像は、彼のグリーン像と同様、完全なものではなかった。この点を、木村健康は『思想体系』の解説のなかで次のように指摘している。

「第一四章の叙述は、然し、グリーン以後の思想界を述べるには余りに簡単である憾みがないわけではない。グリーン以後の思想家達、たとえばF・H・ブラドレー、エドワード・ケヤード、バーナド・ボウザンクウェット〔ボザンケ〕などは『トーマス・ヒル・グリーンの思想体系』に扱われている程簡単には取り扱え得ない程の重要性を持っているし、これらを取り扱うには別の浩瀚な一書を必要としたであろう。」<sup>154</sup>

このように、木村は『思想体系』と同様のボザンケに関する研究書が必要であることを訴えた。そして河合の研究の不備を補うべく、戦後、北岡勲の手によってボザンケ研究が再開された。北岡はボザンケの著作を全般にわたって分析し、「共通善」の概念等を切り口にしてボザンケをグリーンの流れを汲む思想家と定義し、河合の指摘を継受してヘーゲルとは一線を画すものと見なした<sup>155</sup>。その後、日下喜一がボザンケ論を発表し、河合が指摘したようなボザンケの反ヘーゲ尔的側面がより明確にされると同時に、ボザンケとグリーンとの乖離点も指摘された<sup>156</sup>。また、萬田悦生はグリーン研究の一環としてボザンケに言及し、ボザンケの「絶対者」や

<sup>153</sup> むしろ、河合はこのことを自覚しておらず、またその意味で彼自身の内面での思想的衝突も存在していなかったと思われる。河合が「戦闘的自由主義者」として国体護持・国家優位・天皇崇拜の説を唱えることができた究極の理由は、こうした点にも求められよう。

<sup>154</sup> 木村健康「解説」、『全集』第二巻、428-429頁。なお、木村はこのほかに「Bosanquet」の呼び方にも言及し、彼の家系がフランスのユグノー系であることから“ボサンケ”ではなく“ボザンケ”が妥当ではないかと指摘している。

<sup>155</sup> 北岡勲『イギリス政治哲学の生成と展開』（柏林書房、1954年）。

<sup>156</sup> 日下喜一「B・ボザンケの国家理論」（『拓殖大学論集』第32・33合併号、1963年）495-504頁。同『現代政治思想史』（勁草書房、1967年）。

「実在」といった形而上学的概念をその政治思想に連結させながらボザンケの思想の一端を明らかにした<sup>157</sup>。さらに、その後、若松繁信はグリーンと並んでボザンケの研究にも着手し、日下の論文を受けつつ「市民性」(citizenship)を切り口にしてボザンケを分析した<sup>158</sup>。また、大塚桂や、21世紀に入ってから石井健司が、ボザンケをラスキ及びホブハウスの観点から追求して、ボザンケのヘーゲルの側面を改めて強調し<sup>159</sup>、また田村浩志は、前述のように、ボザンケの「慈善」「近隣」概念の検討を通じて、彼の政治思想に内在する多元主義的要素を明らかにした<sup>160</sup>。さらに、かつて木村が要請したボザンケに関する体系的な研究書に関しても、その政治思想に限って言えば、筆者（芝田）によってその研究成果が2006年に公にされ、現在、それに対する評価が待たれているところである<sup>161</sup>。

このように、より客観的なボザンケ研究は数としては決して多くはないが、しかし着実に進められてきた。だが、河合を乗り越えようとして活発に行われてきたグリーン研究に比して、ボザンケやそれ以外の理想主義者、たとえばブラッドリー (Francis Herbert Bradley: 1846-1924)、E・ケアード (Edward Caird: 1835-1908)、W・ウォーラス (William Wallace: 1843-1897)、D・G・リーチー (David George Ritchie: 1853-1903) といった思想家の研究については、やはり遅滞の感が禁じ得ない<sup>162</sup>。その意味で、彼らを含めたイギリス理想主義全体に関する研究は、

<sup>157</sup> 萬田悦生『近代イギリス政治思想研究—T・H・グリーンを中心にして—』（慶應通信、1986年）83-87頁。

<sup>158</sup> 若松繁信「バーナード・ボウズンキットの市民論」（『北九州大学外国語学部紀要』第48巻、1982年）257-288頁。

<sup>159</sup> 大塚桂『ラスキとホブハウス』（勁草書房、1997年）第4章、石井健司「ホブハウスによる「ヘーゲル＝ボザンケ的国家論」批判」（近畿大学法学会『近畿大学法学』第49巻、2002年）315-369頁。

<sup>160</sup> 田村、前掲書、2002年。

<sup>161</sup> 芝田、前掲書、2006年。なお、同書はこれまでに何度か書評に採り上げられたので、参考までに以下に掲げておきたい。萬田悦生「紹介と書評：芝田秀幹『イギリス理想主義の政治思想—バーナード・ボザンケの政治理論—』（慶應義塾大学法学会『法学研究』第79巻第8号、2006年）75-84頁、石井健司「書評：芝田秀幹『イギリス理想主義の政治思想—バーナード・ボザンケの政治理論—』（芦書房、2006年）」（『イギリス理想主義研究年報』第2号、2006年）47頁、稲福日出夫「書評：芝田秀幹『イギリス理想主義の政治思想—バーナード・ボザンケの政治理論—』（芦書房、2006年）」、『沖繩タイムス』2007年2月3日。

河合が後世に残した研究課題として、河合榮治郎そのものの実証的研究とともに、今後さらに進展させねばならないものといえるであろう。

〔本論文は、2010年度沖縄国際大学特別研究費（その他の研究）の研究成果の一部である。〕

---

<sup>162</sup> 我が国では今なお無名の域を出ていないこうした思想家については、筆者（芝田）も「ボザンケ」の項目を担当した（656-657頁）、日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』（研究社、2007年）を参照。また、イギリス理想主義研究の最先端を行くものとして、W. J. Mander, *British Idealism: A History* (Oxford: Oxford University Press, 2011). も参照。なお、同書の以下の書評も参考にされたい。芝田秀幹「書評：W. J. Mander, *British Idealism: A History* (Oxford: Oxford University Press, 2011).」(日本イギリス哲学会『イギリス哲学研究』第35号、2012年) 114-116頁。